

# 弥生時代の再葬制

春 成 秀 爾

- 一 再葬過程の復元
- 二 再葬墓地をのこした集団
- 三 再葬制の系譜
- 四 再葬制の意義

## 論文要旨

東日本の弥生時代前半期には、人の遺体をなんらかの方法で骨化したあと、その一部を壺に納めて埋める再葬制が普遍的に存在した。再葬関係と考えられている諸遺跡の様相は、変化に富んでいる。それは、再葬の諸過程が別々の場所に遺跡となつてのこされているからである。

再葬は、土葬―発掘―選骨―壺棺に納骨し墓地に埋める―のこった骨を焼く、または、土葬を省略してただちに遺骸の解体―選骨……の過程をたどることもあったようである。遺体はまず骨と肉に分離し、ついで骨を割ったり焼いたりして細かく破砕している。骨を本来の形をとめないまでに徹底的に破壊することは、彷徨する死霊や悪霊がとりついて復活することを防ぐとする意図の表れであろう。すなわち、この時期には死霊などを異常に恐れる風潮が存在したのである。

この時期にはまた、人の歯や指骨を素材にした装身具が流行した。これは、

死者を解体・選骨する時に、それらを抜き取って穿孔したものであるが、一部の人に限られるようである。亡くなった人が生前に占めていた身分や位置などを継承したことを示すシンボルとして、遺族の一部が身につけるのである。

再葬墓地の分析によれば、十基前後を一単位とする小群がいくつも集まって一つの墓地を形成している。そのあり方は縄文時代の墓地と共通する。したがって、小群の単位は、代々の世帯であると推定する。

再葬墓は、縄文時代晩期の信越地方の火葬を伴う再葬を先駆として、弥生時代前半期に発達したのち、弥生中期中ごろに終り、あとは方形墳丘墓にとってかわられる。しかし、再葬例は関東地方では六世紀の古墳でも知られているので、弥生時代後半期には人骨を遺存した墓が稀であるために、その確認が遅れているだけである可能性も考えられる。

人の遺体を土葬や火葬などなんらかの手段で骨化したあと、その骨を埋める葬法を再葬と呼ぶならば、再葬は中部・関東地方の縄文晩期から弥生中期にかけて盛んにおこなわれた。再葬の痕跡は、西日本でも、たとえば山口県土井ヶ浜遺跡や鹿児島県広田遺跡などで多数例発見されている。縄文・弥生時代の再葬は、以前に埋葬した遺体を、なんらかの機会に掘り当てたために改葬したものであるとか、「火葬」は、遺体がたまたま火をうけて焼けたものであって真の火葬ではないといって、これを偶発的・例外的な出来事としてすませてきた従来の認識は通用しなくなってきたのである。

近年、中部・関東・東北地方で弥生Ⅰ～Ⅳ期（前・中期）の再葬墓の良好な遺跡がいくつか発掘・報告され、また、この方面に関心をもつ諸研究者の努力によって、基礎資料の蓄積も進んできた。筆者もまた、愛知県伊川津遺跡で縄文晩期の再葬墓多数に遭遇し、再葬について考える機会があった。

小論では、これまでの研究を踏まえ、地域を東日本に限定して、弥生時代の再葬の過程を復元する。そして、その系譜、意義などについて考えてみることにしたい。

## 一 再葬過程の復元

「再葬」遺跡の諸相 これまで関東・東北地方南部から弥生時代の再葬墓として報告された遺跡は、さまざまな様相を呈している（表1）。

表1 「再葬」遺跡の諸例

遺跡	棺	棺内	棺外
群馬県岩櫃山 鷹ノ巣	壺・甕	—	焼けていない人骨の一部（二体分）
群馬県八束原	棺なし	—	焼けた人骨（三四体分以上）の細片多数、加工人歯骨
千葉県岩名天神前	壺・甕	焼けていない人骨の一部	焼けていない人骨一体
栃木県出流原	壺・甕	焼けていない人骨の一部	—
神奈川県大浦山	棺なし	—	焼けていない人骨（八体分）の破片多数、幼児の完全人骨一体
茨城県殿内	壺	焼けた骨	—
新潟県緒立	棺なし	—	焼けた人骨（七体分以上）の細片多数、加工人骨
福島県牡丹平	壺	焼けていない人骨（一体）の一部	—
福島県根古屋	壺・甕	焼けた人骨の一部、三九基	焼けた人骨（一〇〇体分以上）の細片多数、加工人歯骨
岩手県熊穴	棺なし	—	焼けていない人骨（七体分）の一部、一点のみ焼けた人骨
秋田県生石2	壺	—	人骨細片多数

しかし、これらの遺跡にみられる多様性は現象面のことであって、実際はそうではないと思う。以下、諸遺跡の状況について検討を加えながら、再葬の過程を復元してみたい。

遺体を埋める 再葬というばあい、初葬は土葬または風葬を指すのが普通である。風葬は痕跡をのこしにくいから、土葬のばあいをとりあ

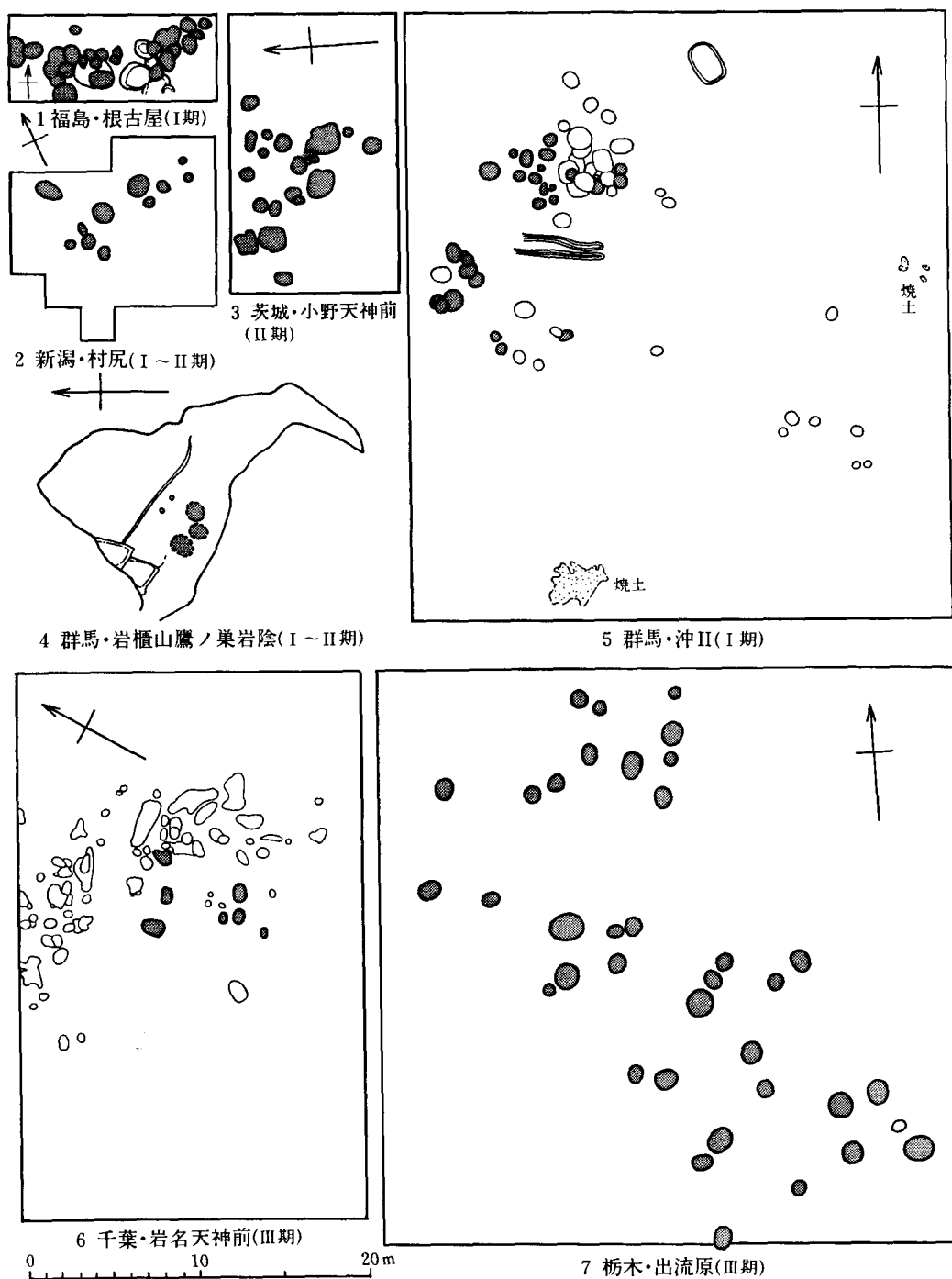


図1 再葬墓の分布状態

げてみよう。初葬が土葬であれば、再葬のために遺体を取りだしたあとに、初葬時の墓穴がのこることになる。この方式で再葬するならば、再葬の墓の数に匹敵するほど初葬時の空になった墓穴の数がなければならぬ。ただし、初葬と再葬がまったく同じ地点でおこなわれることもあるとすれば、このように単純にはいえないかもしれない。もっともそのばあい、初葬の墓穴と再葬の墓穴との間に多少のズレが生じるであろうから、ていねいに発掘すればわかるはずである。

実際の遺跡で具体例にあたってみよう。

福島県伊達郡霊山町根古屋遺跡では、河岸段丘上に六基の土坑と再葬墓二五基が、同じ空間に重複する形で分布していた〔梅宮・大竹編 一九八六〕(図14)。土坑六基のうち二基は底部にベンガラがおりてあったことから、初葬時の墓穴と推定された。それらは長さ二・二メートル、幅一・五〇一・八メートルの大きさをもっており、成人を伸展葬するに十分な規模である。のこりの四基は、長さ約一・九メートル、幅約一・三メートルと長さ一・一・二五メートル、幅〇・八〇一メートルの大小があり、前者は伸展葬、後者は屈葬であれば、墓穴としておかしくはない。これらのうち二基は再葬墓の下になっており、また他の三基の上にも一基の再葬墓が少しずつかかっているから、これらの土坑はこの遺跡で再葬墓をつくり始めた初期の段階に属するのであろう。したがって、この付近に再葬墓をもっとも盛んにつくった時期の空になった墓穴は、まだ確認されていないことになる。六基の土坑が初葬時の墓穴であったとしても、これだけでは初葬は一般的に土葬であったとはいえない。

新潟県新発田市村尻遺跡〔関・石川ほか 一九八二(図1)〕は、台地上に立地し、九〇一〇基の再葬墓群中に位置するA区4号土坑が初葬時の墓穴の疑いがあるとされている。この土坑内には焼けた人骨があったが、土坑の壁や底面に受熱の痕跡がなく、炭化物もなかったことから、これらは土坑外から持ち込んだものと推定された。また、A区12号土坑墓(図2)は長さ一七・一センチメートル、幅九・三センチメートルの小判形を呈し、片隅に焼けた人骨の堆積があり、その上に壺と人形土器がのっていた。しかし、報告者は、「土坑プランや土層・遺物に乱れはないから本来一次葬であったのを掘り起こして再び再葬に利用したとの考えは成立しない」と主張し、人骨は完全に消失しているが、成人の屈葬遺体があり、焼人骨や土器はこれに添えたものではないか、と考えている〔関・石川ほか 一九八二・一〇四〕。いずれにせよ、発掘された再葬墓の数に比較すると、初葬の痕跡は同一地点にはほとんど残っていないかったという状況である。

茨城県那賀郡大宮町小野天神前遺跡〔阿久津 一九七七〕は、河岸段丘上に立地し、二〇基の再葬墓が発掘されたが、初葬と認定できるような墓穴は検出されていない(図1)。再葬の壺をいくつか納めた土坑の形と大きさは、再葬の際に掘ったものと考えるのが穏当である。なお、他より規模の大きい2号墓は、おそらく二基の再葬墓が重なっているのであらう。

それに対して、群馬県藤岡市沖Ⅱ遺跡〔荒巻・若狭ほか 一九八六〕は、自然堤防上に立地し、三二×三六メートルの発掘範囲内に土器棺を埋め

51

た土坑二七基が土器棺をもたない長円形、円形、長方形、方形などの土坑三二基を伴っていた。これらの土坑群は、間に二本の細い溝をはさんでA・Bの二群に分かれて分布していた(図1・3)。A群は土器棺墓一六基、土坑一九基、B群は土器棺墓一一基、土坑五基である。土坑は、この二群から離れてさらに八基ある。土器棺墓と土坑とは、数においてはバランスはとれている。それらのうち、AD-25号土坑(図3)は、覆土の上部は自然堆積であるのに対して、下部は二箇所鋭角的に落ち込む様子が観察され、「数回に亘る掘り込み(掘り返し?)が行われたようである」。下部には、五歳〜二〇歳代の性別不明の数人分の歯二〇点と、大で二センチメートルほどの骨の小片多数、炭化物を包含していた。そこで、報告者はこの土坑を「数回の埋葬と、掘り返しという行為が営まれた、仮設的な埋葬施設であり、改葬に伴う一次葬の場である」と性格づけている(同前:一二四)。しかしながら、他の土坑は発掘時の所見では、一度掘って埋まった(埋めた?)あと、再度掘り起こしたような形跡は示しておらず、報告者は「性格は不明」としている。また、土坑は深さが二〇センチメートルほどで、土器棺墓の深さが五〇センチメートル前後であるのにくらべるとひじょうに浅く、完全な土葬は考えにくい。それでも土坑を初葬のためというのであれば、浅い土坑を掘って遺体を置いたあと、土を十分にかけなかったと考えざるをえないだろう。

山形県酒田市生石2遺跡(小野一九八七)は、沖積地に立地し、土坑、再葬墓、「台石遺構」を伴う骨粉散布からなる。土坑一五基は径約一二メートルの弧状に分布し、そこから約六メートル離れて、壺を納めた土

坑八基が五×九メートルのまとまりをもって検出されている。土坑は長さ一メートル前後の円ないし楕円形が主体で、深さは五〜二五センチメートルにすぎない。埋土中に礫、土器片、剝片などを含んでいる。

埼玉県熊谷市小敷田遺跡は、沖積地に立地し、住居跡と濠が発掘されている池上遺跡と対になる遺跡である。道路建設に伴う帯状の部分発掘で、Ⅲ期後半に属する関東地方最古の方形墳丘(周溝)墓三基を検出、溝の中に一段深く掘られた土坑に一〜二個の壺が直立または横転しており、再葬墓の状況を呈していた。墳丘墓の中央主体は削平をうけて消失していた。その一方、墳丘墓に接して八基の土坑が検出されている(図4)。土坑は長さ〇・八〜一・三五メートル、一例のみ二・四メートル、深さ一〇〜五五センチメートルの楕円〜円形である。さらに、一区の方形墳丘墓群から百メートル余り離れた二区からも円〜楕円形の土坑が一七基検出された。遺物はそのうちの二基から打製土掘具が出土しただけである。その多くは長さ一・一〜一・七メートル、深さ一〇〜九〇センチメートルで、これらも墓坑の可能性がつよい。そこで、墳丘墓の溝内埋葬と関連づけるならば、この遺跡では関東地方在来の再葬墓が、西日本から伝来した方形墳丘墓の内部主体として採用されている可能性も考えられる。すなわち、このばあいは、初葬は土葬を想定することになる。

このように、この時期には、一般に初葬として土葬をおこない、後にその骨を取り出して再葬をおこなったと考えられているが、骨化の方法がすべて土葬であったという証拠は、まだ十分にあがっているとはいえない。

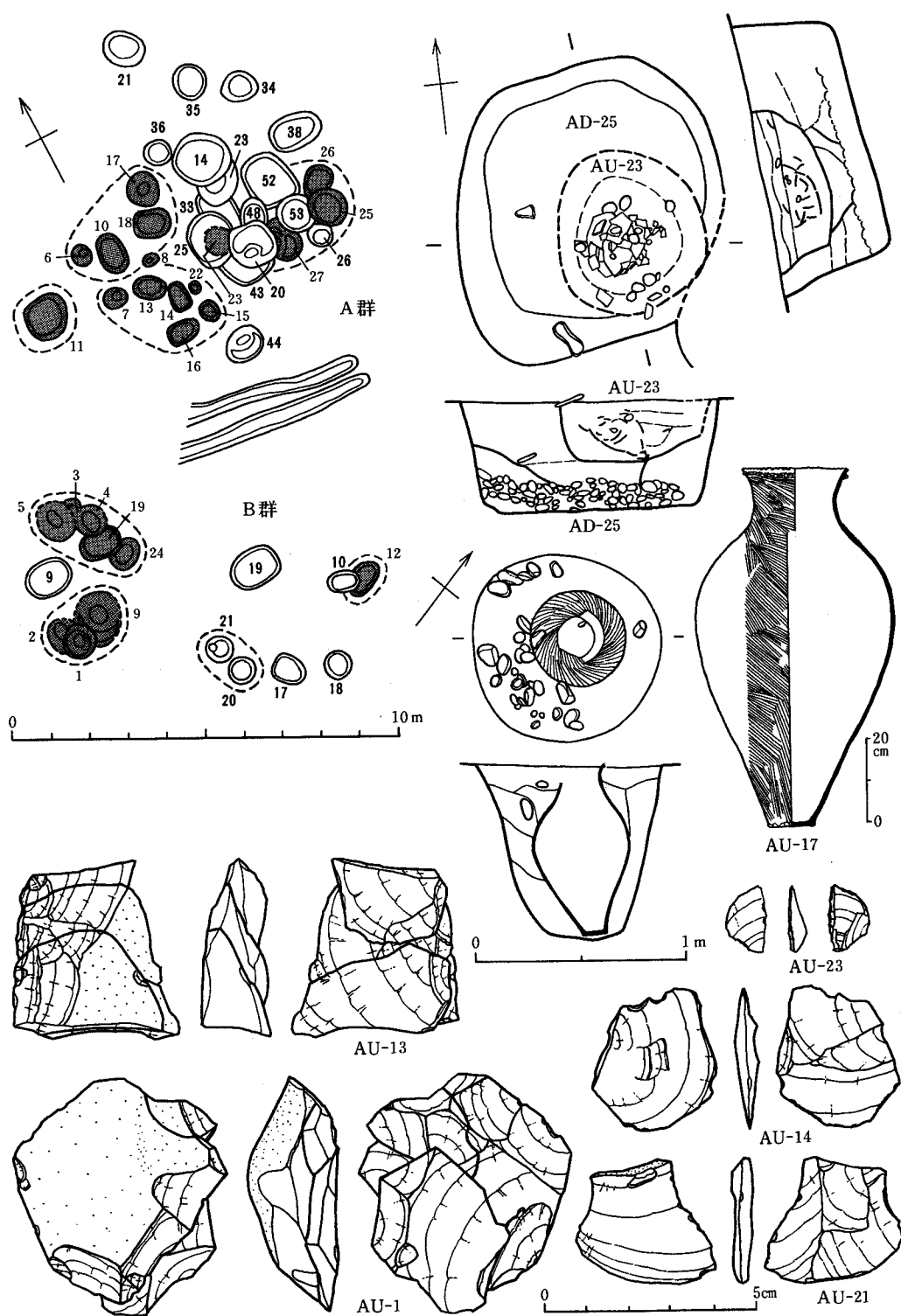


図3 群馬県沖Ⅱ遺跡の再葬墓地の群別、遺構、出土石核・使用痕のある剥片〔荒巻・若狭ほか 1986から作成〕

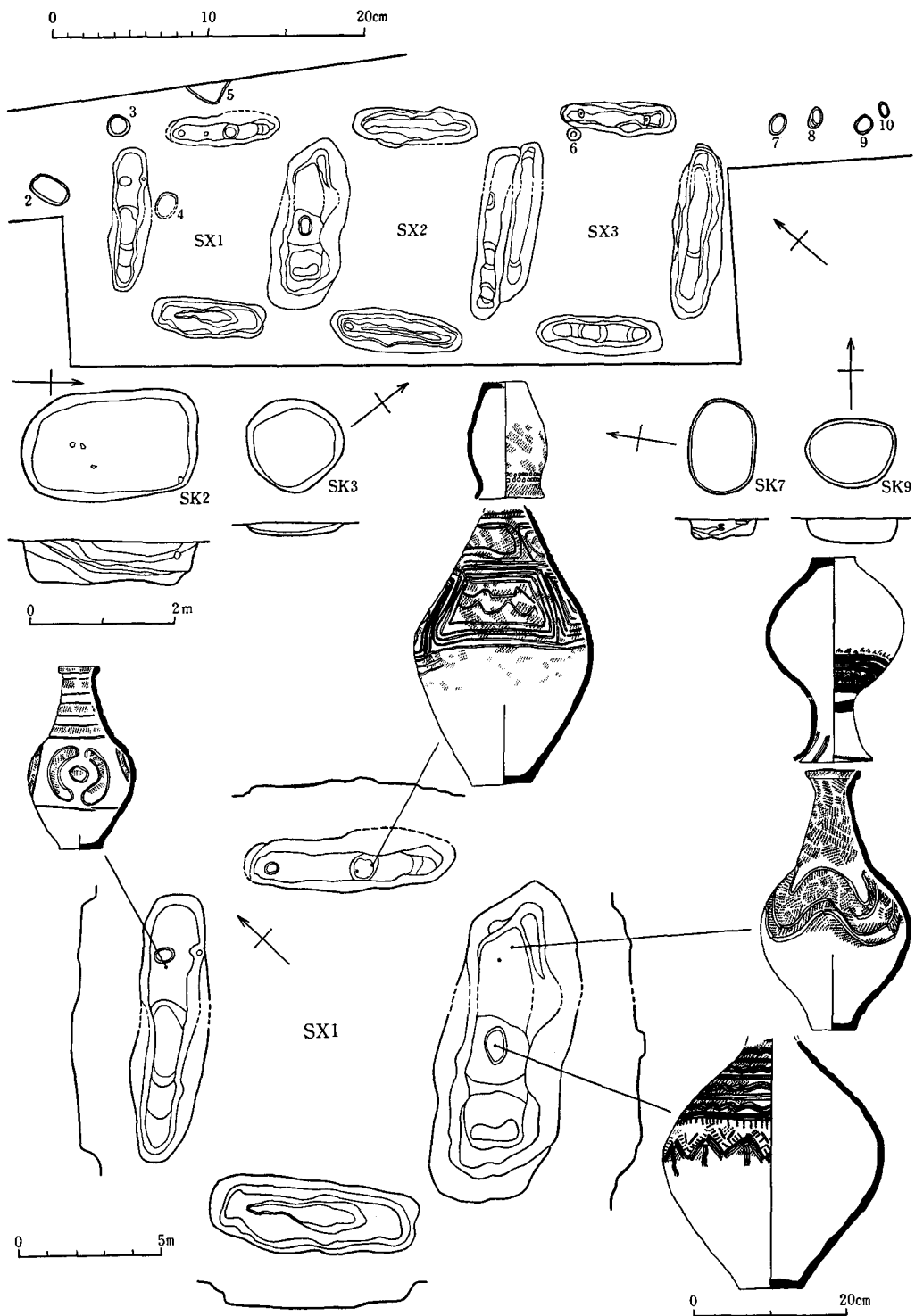


図4 埼玉県小敷田遺跡の方形墳丘墓と土坑、再葬墓  
〔吉田編 1991から作成〕



# 遺骸を解体する

神奈川県三浦市大浦山洞穴は、三浦半島の先端に位置する海蝕洞穴である。洞穴は、海に直面し、入口幅八メートル、高さ六メートル、奥行二〇メートル、断面三角形の洞穴(図5・6)で、弥生Ⅳ期(宮ノ台式)・Ⅴ期の遺跡である〔赤星一九六七〕。出土人骨を調べた鈴木尚は、この遺跡を、食人の痕跡をのこす遺跡として報告している。その根拠は、これらの遺跡から出土した成人人骨のうち、頭骨には「斬首のため」・「頭皮を削ぎけずる」・「耳をそぐ」・「脳を露出させる」・「脳を取り出す」際の切り傷・破損、脊椎骨には「斬首のため」、鎖骨には「大胸筋をはがす」、肩甲骨には「上肢の離断のため」、上腕骨には「肩関節と肘関節を離断」する・「骨髓食?」、骨盤には「下肢の離断」・「内臓露出?」、大腿骨には「大腿の離断」・「骨髓食?」、脛骨には「下腿の離断」・「骨髓食?」、腓骨には「足関節にて離断」、足骨には中足骨から先を離断する、などの切り傷と螺旋状剝離をもつ人骨の破砕の痕跡を認め、それらが動物を解体したときの切傷または、動物の骨の髄を食べるときの破砕と同じであるという点にあった(図6)。そこで、鈴木は、縄文晩期の愛知県渥美郡渥美町伊川津貝塚(鈴木一九三八)と同じく、大浦山人は人肉食の習俗をもっており、その理由は復讐であると考えた〔鈴木一九六六〕・〔鈴木一九八三・一六一〜一六六〕。

それに対して私は、一九八四年の伊川津遺跡の発掘で多数の再葬の痕跡を確認する一方、鈴木が再葬の習俗の存在を考慮せずに伊川津人の食人説を提出していたことに疑問を感じた。そこで、大浦山洞穴の人骨の傷は再葬のための解体のあととみなし、また幼児の完全な遺体の埋葬を

おこなっていた事実から、復讐を目的とする食人をしたと考えるのは不自然として反対した〔春成一九八六・一四六〜一四七〕・〔春成一九八八・四一〇〕。

しかし、鈴木の人食説の根拠から重要な事実を引き出すことができる。すなわち、獣骨と人骨の傷がまったく同じだとすれば、これらの人体は肉が完全についているときに解体したということである。すなわち、これを単なる食人のあとではなく、再葬制の一過程と考えれば、死後まもなく遺骸の解体にとりかかり、さらには骨から肉を切り離し、骨だけにして、その骨をまた割っていることになる<sup>(2)</sup>。そうであれば、このばあいには、初葬として土葬や曝葬などをしなかった可能性があらう。

抜歯した人骨片を二〇体分以上出土したことで古くから有名な千葉県館山市安房神社洞穴〔大場一九三三〕・〔小金井一九三三〕も、遺骸解体の場に、選骨後の人骨(後述)を取り残した遺跡なのであらう。そして、その時期は、抜歯習俗の盛行、オオツタノハ製の貝輪の伴出などから判断すると、かつていわれたような古墳時代までくだる新しい時期のものではなく、おそらく弥生Ⅰ〜Ⅱ期であらう。遺骨に解体用の傷がついている例は、根古屋遺跡出土の大腿骨と手指の中節骨にもある〔馬場ほか一九八六b・一一八〜一二九〕。また、新潟県西蒲原郡黒埼町緒立遺跡の砂層中から廃棄した状態で出土した頭蓋骨・下顎骨や四肢骨にも、鋭い刃物による多数の切傷がのこっていた〔笹川ほか一九八三・九八・一〇二〕・〔外山ほか一九八九・一〇〜一一〕・〔春成一九九二・九三・九五〕。

そこで想い起こすことは、群馬県吾妻郡吾妻町岩櫃山鷹ノ巣岩陰、藤



図5 神奈川県大浦山洞穴の遠景〔横須賀考古学会編 1984写真〕と三浦半島先端部の洞穴遺跡の立地（1 雨崎、2 大浦山、3 間口、4 毘沙門）

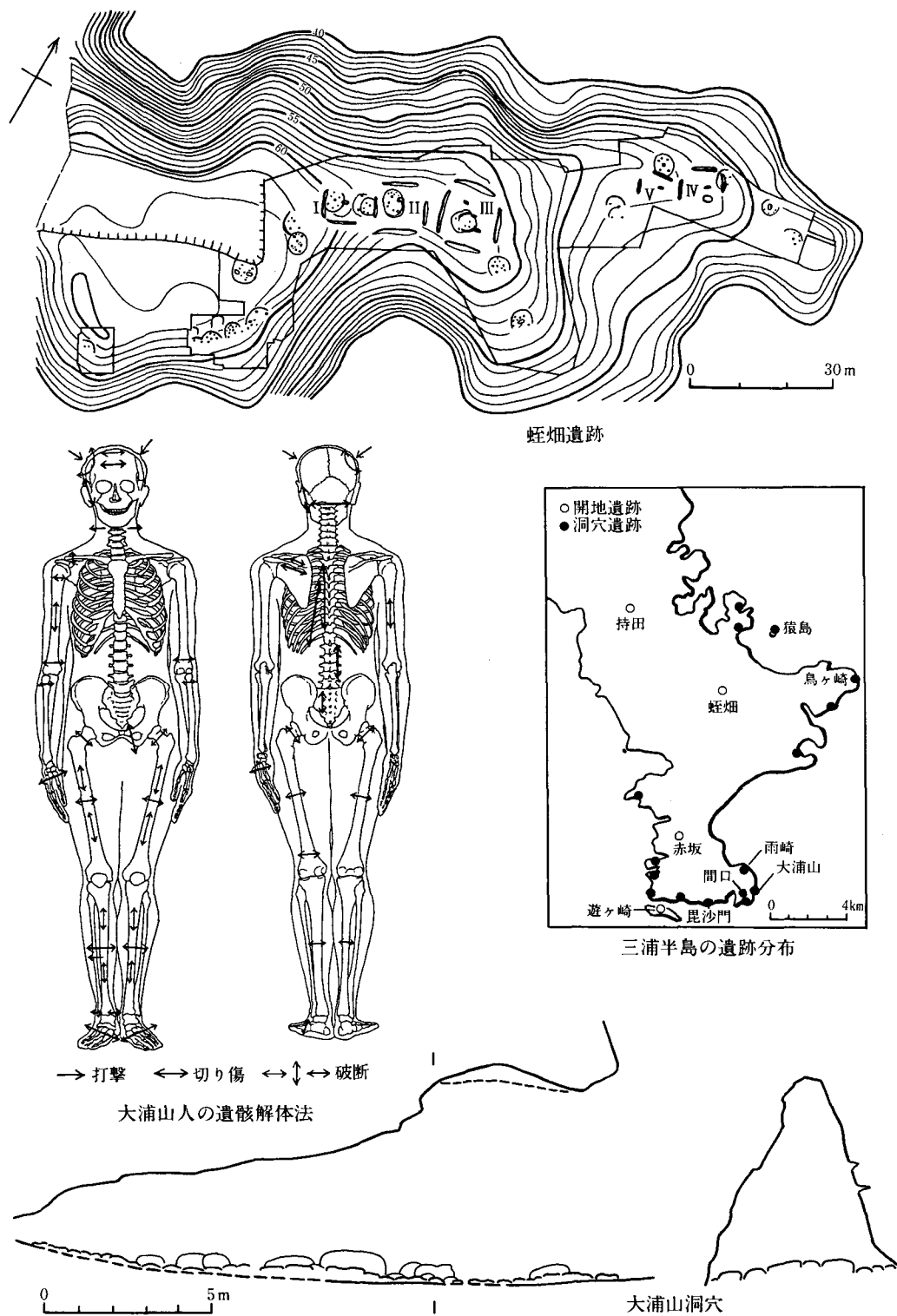


図6 神奈川県蛭畑遺跡と大浦山洞穴、遺骸の解体法 [浅川ほか 1987]・[鈴木 1983]・[横須賀考古学会編 1984から作成]

岡市沖Ⅱ、福島県会津若松市南御山、群馬県利根郡月夜野町八束脛洞穴遺跡などから、チャート・黒曜石・安山岩・凝灰岩・碧玉などの剥片や石核が出土している事実である。出土遺構との関係がよくわかる沖Ⅱ遺跡でみると、土器棺を埋めた土坑二七基のうち剥片を伴ったものが八基、単なる土坑四九基のうち石核・剥片を伴ったものが一九基あり、一遺構からの出土数は一〜六個であった。なかには石核と剥片、剥片と剥片が互いに接合するものがあり(AU-1、AU-13、AU-21)、遺跡付近で剥片を作ったことを明らかに示している。通常の生活の場ではない場所のこざれている以上、これらの剥片は埋葬との関連で作り使ったとみるのが妥当であろう。沖Ⅱ遺跡出土の剥片には、AU-14号墓出土の「刃潰し状の細かい剝離調整が施される」例、AU-21号墓出土の「何らかの細部調整が加えられている」例、「一側面に細かい調整と思われる剝離がみられる」「スクレイパーとも思われる」例、AU-22号墓出土の「一端に刃潰し状の細かい調整が残されている」例、AU-23号墓出土の「断面三角形を呈し、一側面に表裏両面からの剝離調整が加えられている」例などがある(図3)。私も、月夜野町歴史民俗資料館で八束脛洞穴出土の碧玉製剥片に刃こぼれが生じているのを観察したことがある。これらは、指の切断に始まる(後述)遺骸の解体用のナイフであったのではないだろうか(春成一九八六・二二)。このように考えるならば、八束脛洞穴から出土している大型蛤刃の磨製石斧の用途も、遺体を解体するところにあつたと解釈することができるかもしれない。とりあえず大浦山洞穴では、成人の遺体さらに遺骨を徹底的に破壊している一方、

幼児の遺体は別扱いしていた事実を確認して前へ進もう。

### 遺体を煮る?

再葬に使った土器は、根古屋遺跡では、九四個の

壺・甕のうち六〇個(うち壺は四一個)の内外面に炭化物が付着しており、村尻遺跡でも三四個の土器のうち一七個(うち壺は一〇個)にススの付着が認められた。また、一一個の壺には器面の小剝離(ハジケ)が見られた。なかには、加熱によるヒビ割れを、穿孔して紐で縛って補修したり、漆状の樹脂で接合した例も少なくない。これらの現象は、日常生活で使っていた容器を棺に転用したからだと解釈されたり(大竹一九八六・五六)・[石川一九八七・一五〇]、「壺棺埋置に先立ついずれかの時点で火熱を用いる祭儀行為」と想定されている[石川一九八九・二八]。

確かに、福島県下谷ヶ地平C遺跡の住居址など生活遺跡から出土する壺にも、炭化物の付着が顕著な例があるし[芳賀一九八六]、再葬用の壺・甕のなかには、底部が使用によって磨滅している例もあるから、日常生活で使っていたものを転用したこともあったのかもしれない。なかには被葬者が生前愛用していた壺も含まれていたかもしれない。この時期には壺も煮沸具として使うことがあった[佐藤一九八五]のは確かであるが、村尻遺跡出土の人形土器のように、再葬用に作った土器で、火をうけたあと補修した確実な例が知られているから、再葬墓出土の壺や甕がうけた火熱は、基本的に再葬と関連づけて説明すべきであろう。

では、甕や壺は何を煮沸するのに使ったのであろうか。実物にあたって観察すると、ススが付いたのは埋葬する寸前のことであつたかのように、黒々とその痕跡をとどめているばあいがある。埋葬と直接関連のあ

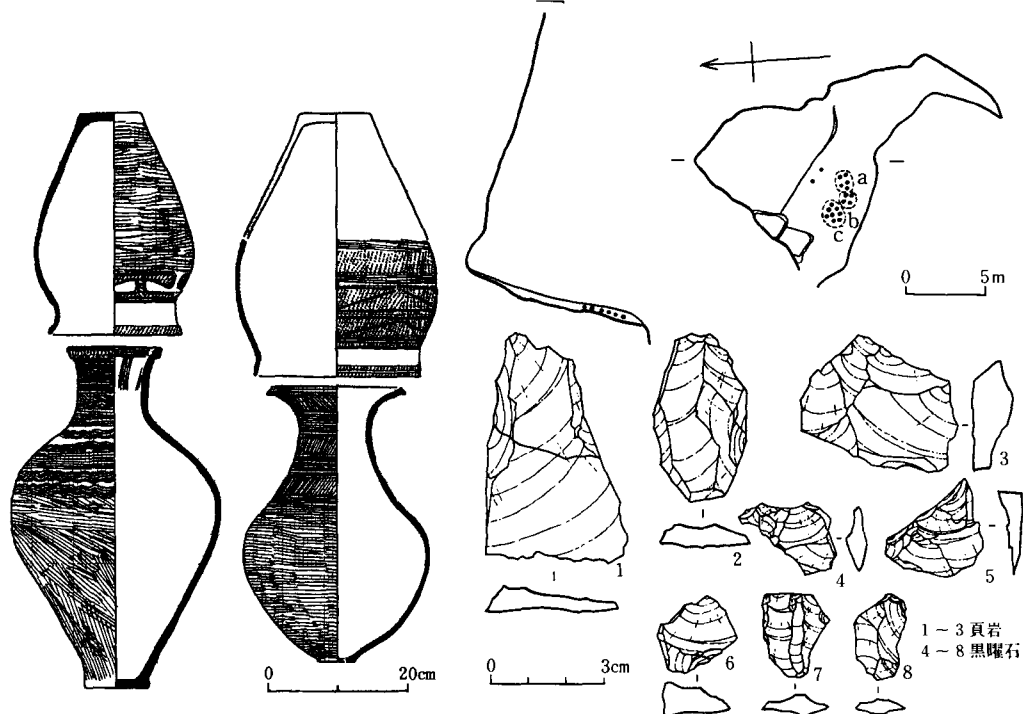
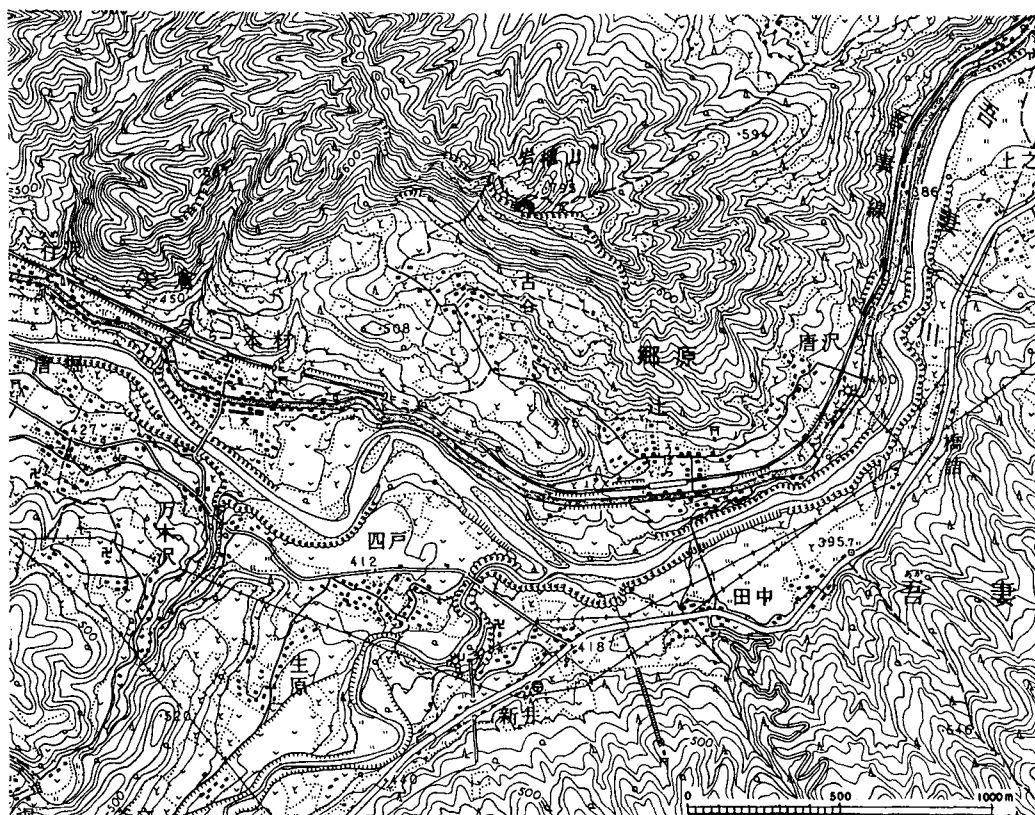


図7 群馬県岩櫃山鷹ノ巣岩陰遺跡の立地、b群土器、出土剥片  
[杉原 1967から作成]

るものを煮たと考えたいところである。

千葉県佐倉市岩名天神前遺跡1号墓の1号壺のなから、近位端と遠位端を欠く脛骨片(長さ一九・三センチメートル、近位端の太さ三・五×二・一センチメートル)が出土したが、壺の口のもっとも細くなった頸部の内径は七・二センチメートルにすぎない(深さは三八・八センチメートル)。その骨を土器に納める時は骨だけになっていたのであろう。となると、それ以前に骨から肉を完全に落としていたと考えざるをえない。それは、一次的に土葬しておいて骨化したものか、そうでなければ骨から肉を掻き落として骨だけにしたものでなければならぬ。後者の場合は、肉は時間をかけて煮たほうが骨から剥がしやすい。附着物などの脂肪酸分析による証明はまだできていないが、私は、甕や壺で煮たのは、人肉であった可能性も推定する。岩名天神前遺跡の壺の内部にのこっていた人骨は、遺体を解体し、煮た場所で、壺に納める際に邪魔になる近位端と遠位端の関節部を打ち欠いたものかもしれない。ただし、肉のついた大きな骨を壺にいれて煮るには、頸部が細すぎるから、そのばあいには甕を使ったことになろう。

**遺体を焼く** この時期の再葬は、しばしば火葬を伴っているのが特徴的である。

群馬県八束脛洞穴は、石尊山(標高七四五メートル)から派生した溶結凝灰岩の岩山の頂上近くの崖面に縦に四箇所あった洞穴のうち、最上部のD洞(幅一二・六メートル、奥行五・二メートル、高さ三・七メートル)の内部のほぼ全面にわたって焼骨の細片多数が散乱している。所

属時期を示す土器(Ⅲ期、須和田式)は小破片こそ出土しているが、三四人分以上と推定される人骨を収納するための土器の数としては、あまりにも少なすぎる。つまり、ここでは、人骨を納めた土器棺の存在は明らかでない。そこで、報告者は、この洞穴が再葬の場であるという前提のもとに、この遺跡では再葬は焼骨を土葬または散布する形態と推定している(宮崎はか一九八五・一〇三)。しかし、この時期の関東地方で再葬する際に、人骨を散布する葬法(散骨、散葬)は確実には知られていない。類似する例は神奈川県三浦半島の大浦山洞穴や間口洞穴遺跡であるが、このばあいも別な解釈が可能なことは後述するとおりである。

福島県根古屋遺跡では、火をうけた人骨の小破片多数が約二×二メートル以上の範囲に、厚さ一〇〜一五センチメートルの層を形成していた(図14)。その層は、再葬墓をおおっており、近辺に火葬の場が存在したことを示唆している。しかし一方、人骨のない土坑が六基発見されているから、それらを再葬墓と同じ時期のものとするれば、土坑にいったん埋葬したのち遺体を掘り出し、火葬したことになる。すなわち、初葬と再葬の場が重複している例ということになる。

ところが、根古屋遺跡のばあいは、壺にススが付いている一方、再葬された人骨もすべて焼かれて細片になっている。したがって、ここでは遺体は煮る過程と焼く過程を経ていると考えるほかない。とすれば、人骨を焼くときは骨に有機質はのこっているが、肉はほとんどついていなかったことになろう。

新潟県村尻遺跡では、前述のA区12号土坑墓は、底の片隅に、七六×



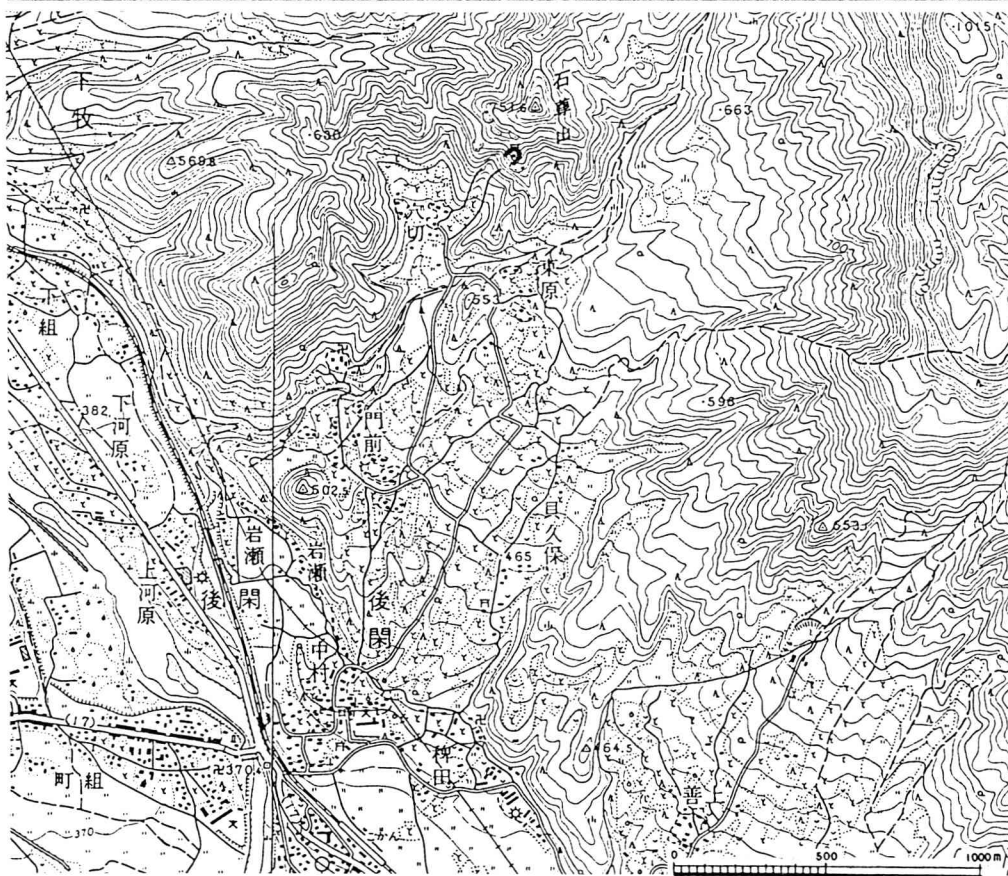


図8 群馬県八東脛洞穴の立地（写真では中央の大きな露岩の上部）

四四センチメートル、厚さ一三センチメートルの焼けた人骨片の堆積があった(図2)。

これらの遺跡から出土した人骨は、性は男女を含み、年齢的には幼児から成人熟年までを含んでいる。八束脛洞穴では、抜歯の4Ⅰ系八例、2Ⅱ系八例の存在が確認されたが、その下顎骨はすべて焼けている。根古屋遺跡では、抜歯は4Ⅰ系九例、2Ⅱ系一四例とまとめることができる。すなわち、抜歯の二系列とも一定量並存する〔春成一九八七・八〇〕。この時期のこの地方では再葬以外には他に葬法は知られていないから、これらの遺跡ではすべての人が火葬の対象になったと考えてよい。

とところで、洞穴に焼骨が散布する八束脛遺跡といい、壺の中やその周辺から焼骨が検出された根古屋遺跡といい、あるいは壺のなかに焼骨を納めた出流原遺跡といい、焼骨は細かい多数の亀裂や収縮・変形を生じた細片ばかりである。人骨は少々加熱してもこのように変化することはない。晒した状態の骨ではなく、軟部が付着した骨を、摂氏九〇〇度以上の高温で長時間熱しつづけないと、このような変化は生じない、という〔池田一九八二〕・〔馬場はか一九八六a・九三・一〇五〕。したがって、焼骨にみられる諸変化は偶然の結果ではなく、大量の薪を用意して長時間にわたって人骨を焼きつづけた結果にはかならない。加熱の目的の一つは、人骨を徹底的に破壊することにあつたのではなからうか。

ただし、再葬制をとっているすべての集団が火葬を採用しているわけではない。秋田県生石2遺跡では、一五基の土坑群に囲まれるように二、三〇センチメートル大の「台石」と円礫からなる「台石遺構」三基がの

こされ、その周辺一帯に、木炭片を含む層があり、「破碎され飛び散った状態で多くの骨粉が検出」されている。報告者の小野忍は、「台石遺構で骨を二次処理」した可能性を考えている〔小野一九八七・二三〕。人骨が焼けていたのかどうかの記述がないが、ここでは土葬して骨化したあと、その骨を石で砕いていることになる<sup>(3)</sup>。

#### 歯や指骨を抜き取る

この時期の再葬の意味を探るうえで特に注目すべきは、群馬県八束脛洞穴〔宮崎はか一九八五〕・〔外山はか一九八九〕、福島県根古屋〔馬場はか一九八六〕、新潟県緒立〔笹川はか一九八三〕・〔外山はか一九八九〕、埼玉県わらび沢洞穴〔吉田町教委編一九八二〕、長野県月明沢洞穴〔西沢はか一九七八〕の諸遺跡から人の歯や指の骨に孔をあけてつくった装身具が検出されていることである(表2)。加工の対象となっているのは、緒立遺跡では頭蓋骨、下顎骨、四肢骨、肋骨まで及んでいるが(図10)、他の遺跡では歯と手足の指骨だけである(図9)。そして、手足の骨は、長い管状を呈する中手骨、基節骨、中節骨と中足骨、基節骨、中節骨だけあって、短い末節骨や小さな塊状をした手根骨や足根骨は用いていない(図11)。すなわち、身体の末端に位置し、肉の付着が少なく、取り外しまたは切断がもっとも容易な部位である。さらに、いずれも小さな管状の骨であるから、装身具にするにはもっとも適した部分といつてよい。

手足の指骨でつくった装身具を多出した八束脛、緒立、根古屋の三遺跡を細かく比較すると、選択した骨に差異があることがわかる。八束脛では加工品は、手の基節骨と中節骨だけであつて、中手骨は二九点、中



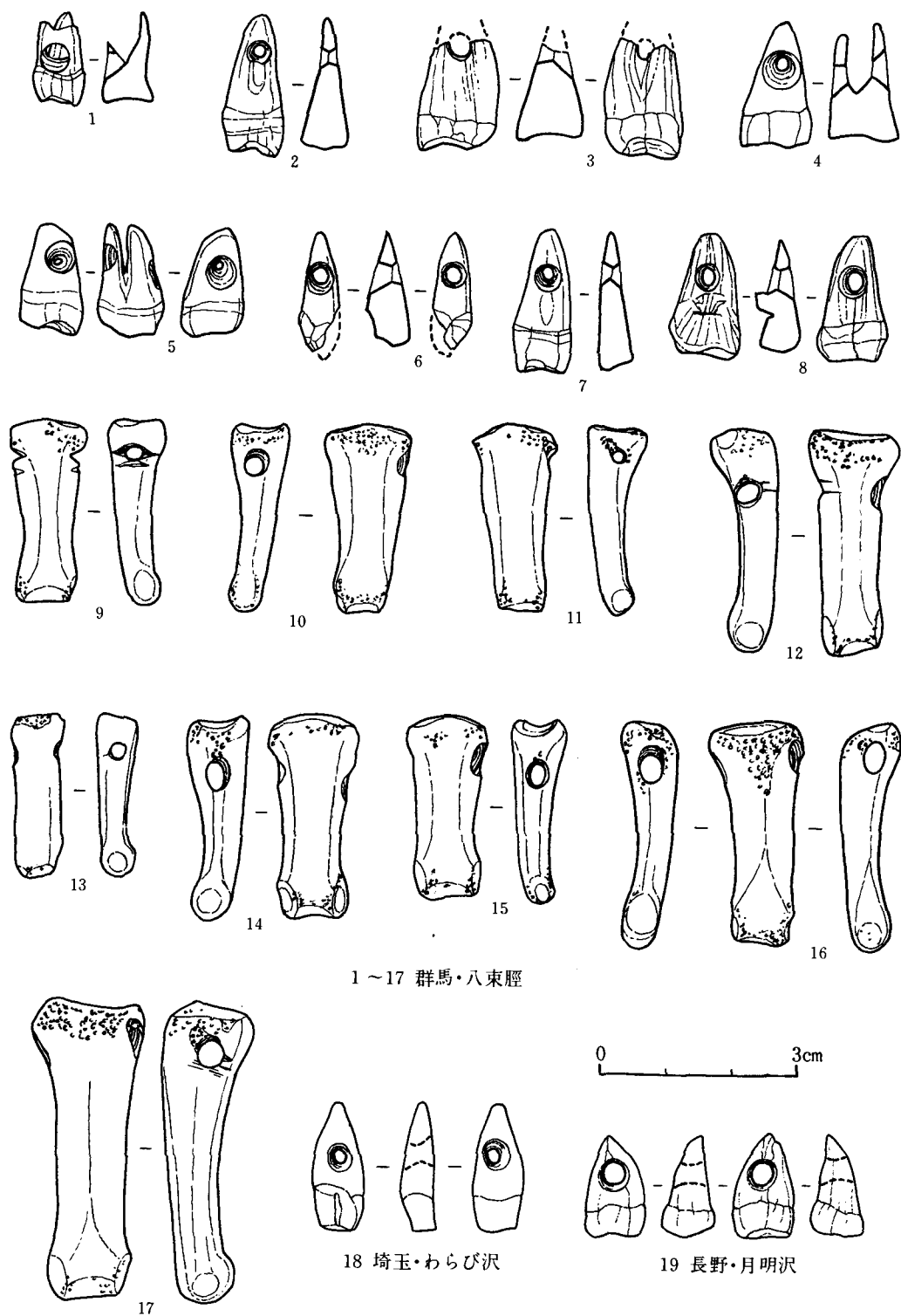


図9 群馬県八束脛洞穴、埼玉県わらび沢洞穴、長野県月明沢洞穴出土の人歯・骨製装身具〔外山ほか 1989〕・〔吉田町教委編 1982〕・〔西沢ほか 1978〕

表2 人歯・骨の加工部位

	上 I <sup>2</sup>	C	P <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	M <sup>3</sup>	下 C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>	不明	頭骨	下顎骨	四肢骨	中手骨	基節骨	中節骨	中足骨	基節骨	中節骨	合計
群馬県八束脛	—																							一八
群馬県有笠山																								
長野県月明沢		—																						一一
埼玉県わらび沢																								一一
新潟県緒立																								一九
福島県根古屋				—							—	—							指骨		四	六		二三

足骨は一五点同定されたが、それらのなかには加工品は一点も含んでいなかった。緒立遺跡では加工品は、中手骨と中足骨だけで、基節骨、中節骨の加工品はまだ見いだされていない。根古屋遺跡では、加工品は、おそらく手は中手骨から中節骨、足は基節骨と中節骨である。また、穿孔の位置は八束脛洞穴では指骨の近位端ばかりであるのに対して、緒立遺跡では近位端と遠位端があり、根古屋遺跡では今度は遠位端だけである〔外山ほか一九八九・一四〕。また、頭蓋骨・下顎骨・四肢骨に穿孔した例は緒立遺跡からのみ出土している。こうしてみると、装身具に加工する人骨の部位にも、穿孔の位置にも、おそらく若干の集団差なり年代差なりがあったのであろう。後者だとすれば、頭・手足から歯・手足、そして歯だけへの移行を考えることができる。そう考えてよければ、この習俗は、新潟・福島付近で成立し、群馬・長野・埼玉方面へ広がった可能性があろう。

この時期には抜歯の風習がさかんであって、切歯・犬歯がその対象となっている。ところが、装身具に加工した歯の種類は、小白歯・大白歯

であって、抜歯する歯より遠心側に位置するいわゆる奥歯である。したがって、これらの歯が死後の抜歯によって得たものであることはまちがいない。これらの装身具は、他の骨のようにには破壊をうけていないし、火もうけていない。火をうけていたにしても軽度であって、それは装身具にしたあと遺体とともに二次的に焼いたものと解釈して誤らない。したがって、一部の歯や手足の指骨を抜きだす行為が、人骨を加熱し破壊する前にあったのである。

根古屋遺跡から出土した手の中節骨(図11)の、遠位背と腹側面に内外側方向の細い傷を多数見いだした馬場悠男らは、それが「指を切り離そうとした」際についたもので、「遺体の軟部が残っている状態」であったために切断する位置を誤り、離断できなかったために穿孔しなかったのだと解釈している〔馬場ほか一九八六b・一一八・一二九〕。しかし、この指骨は、切り離されなかったのではなく、おそらく、基節骨のほうを穿孔して装身具にしたと考えたほうがよい。同遺跡からは他にも加工していない指骨が出土し、なかには再葬の壺のなかから見いだされた例も

あった。指骨を抜く対象は、年齢的には、壮年から熟年までの成人だけでなく、三歳ぐらいの幼児まで含んでいるが、性は不明である。また、死者のすべてから抜いたか否かも問題である。

八束脛洞穴にせよ根古屋遺跡にせよ、出土人骨の個体数に較べると、人歯・骨製の装身具の発見数は少ない。八束脛洞穴では三四体分以上の人骨が出土し、そのなかから手の指骨に穿孔した装身具が一〇点検出されたが、それは同じ部位と鑑定された九九破片のうちである。この九九破片は孔から外れた位置も含んでいるであろうから、全体の一〇%よりも高い比率ではあるが、かといって五〇%を超えるとは思えない。穿孔された歯も、四七本のなかの八本なのである。根古屋遺跡でも、一〇〇体分以上の人骨が出土し、第一中手骨が一二個（右八、左四）、第一中足骨が一七個（右一〇、左七）同定されたが、そのうち加工が確認されたのは、前者が一個、後者が皆無であったから、すべての人から同じ位置の歯と指骨を抜いたというわけではなく、むしろ一部の人の歯・骨を抜いたと考えたほうがよい。したがって、これらは頸飾りとして使用したと仮定すれば、一本の緒に多数を通せば、ごく一部の人の佩用品となるし、一本の緒に一、二個だけ通したとしても、やはり一部の人の着装品ということにはかわりはない。耳飾りとして使用したとすれば、後者と同じことが考えられるが、八束脛洞穴や出流原、女方遺跡などから出土している管玉と組み合わせ、やはり頸飾りとして佩用した可能性のほうがつよいと思う。

緒立遺跡出土の下顎骨穿孔例二点は、大阪市森の宮遺跡出土の下顎骨

完全品（女性、壮年）の筋突起や下顎角を削り、左右の下顎頸に溝を彫って紐で結びとめるようにした弥生Ⅰ期の例〔寺門ほか一九七八・一七〇〕を連想させる。これらは、おそらく腕飾りとして使用したのであろう〔春成一九九一・九一〜九三〕が、ごく一部の死者の下顎骨を、ごく一部の遺族が身につけたものと考えざるほかない。

同じことは、管玉についてもいえる。栃木県出流原遺跡の再葬墓三七基のうち管玉を伴ったものは一五基、そのうち八個一基、七個一基、五個一基、四個一基、三個二基、二個五基、一個四基というように、管玉の有無、個数に差が認められる。やはり一部の者が管玉を身につけて、しかもそのなかでまた多寡の差をつけている。しかし、それにしても、一人あたり着けている管玉の数が少なすぎる。これは、人歯・骨を身につける習俗が、管玉を着けるように変化した、少数着装という原則だけは踏襲したとみるべきであろうか。

**選骨する** 遺体はなんらかの方法で骨化されたあと、一部の骨が選び出された。そして、それは一ないし数個の壺または甕に容れられた。壺または甕のなかに骨が遺存していた例は、表3のとおりである。

こうしてみると、土器に容れて最終的に再葬した人骨の量は、きわめて僅かということになる。したがって、のこりの大量の人骨は選骨の場へのこされたか、そうでなければ、なんらかの方法で処理されたことになる。根古屋遺跡のばあいは、再葬墓から約三キログラムの人骨が出土したが、他に人骨の包含層中に約四二キログラムもの大量の人骨がのこっていたから、この場所で選骨と再葬をおこなったことは確かである。

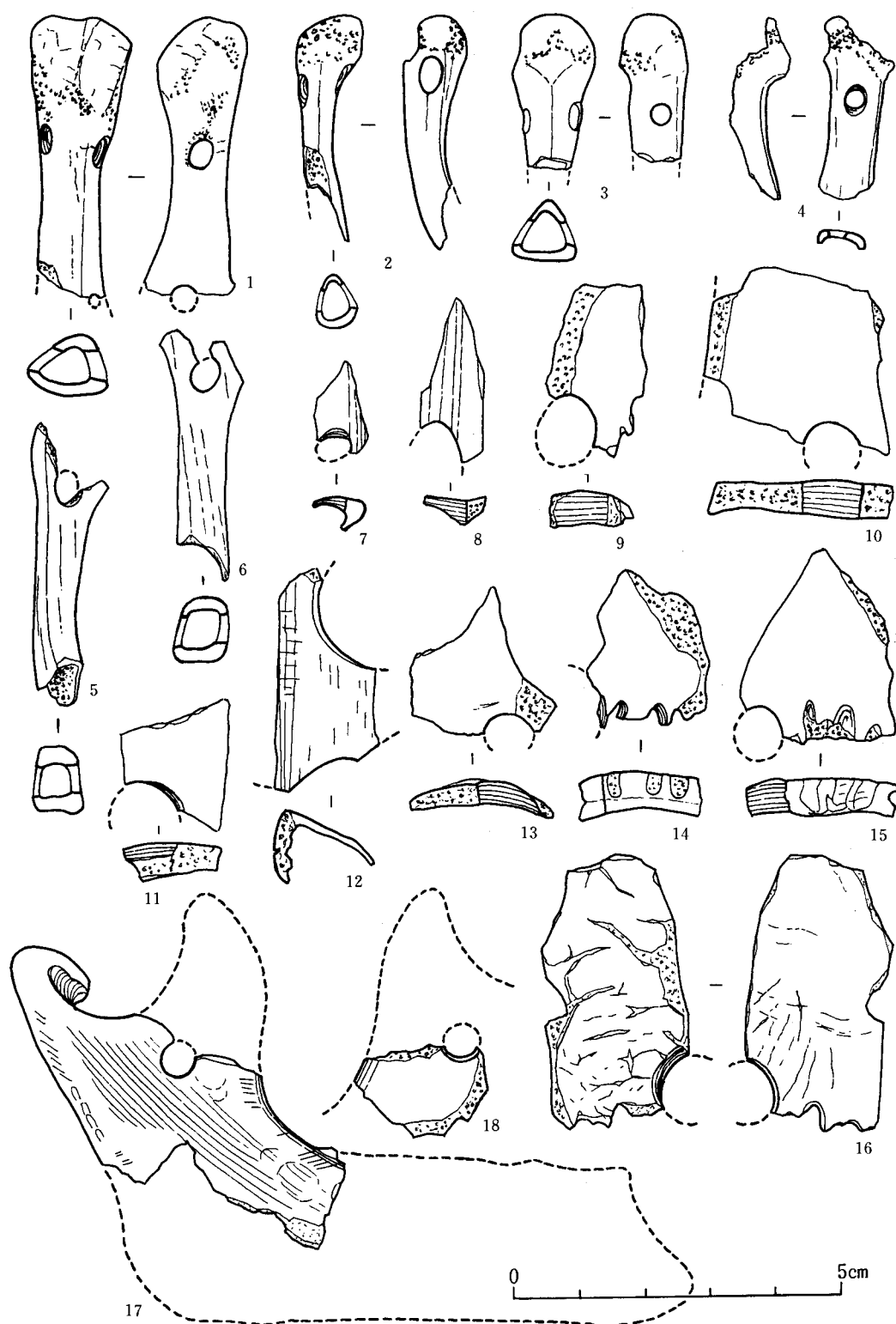


図10 新潟県緒立遺跡出土の人骨製装身具 [笹川ほか 1983]・  
[外山ほか 1989]・[春成 1991]

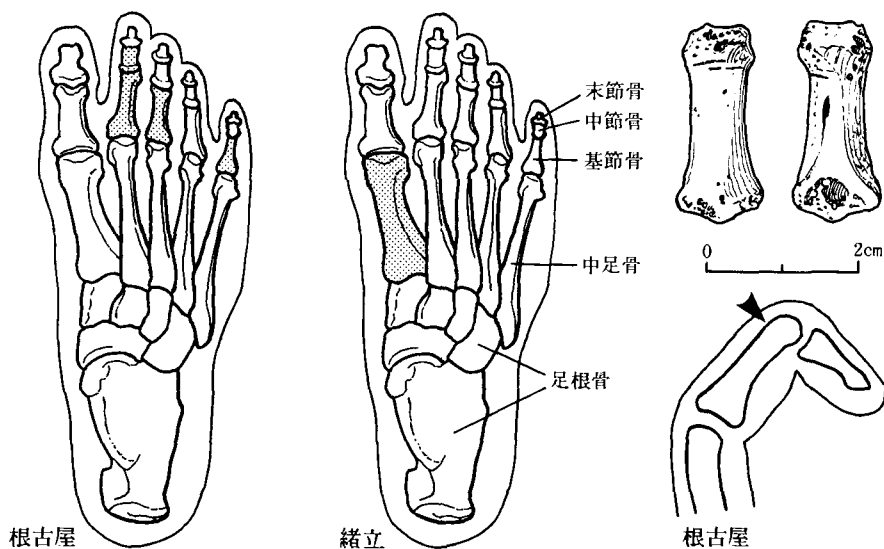
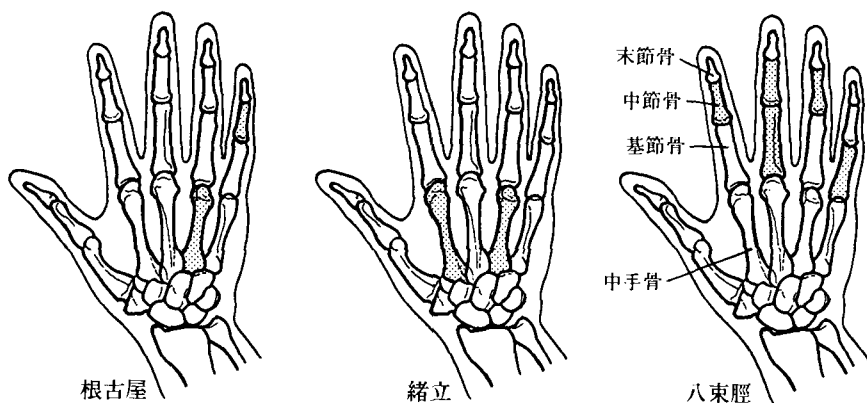
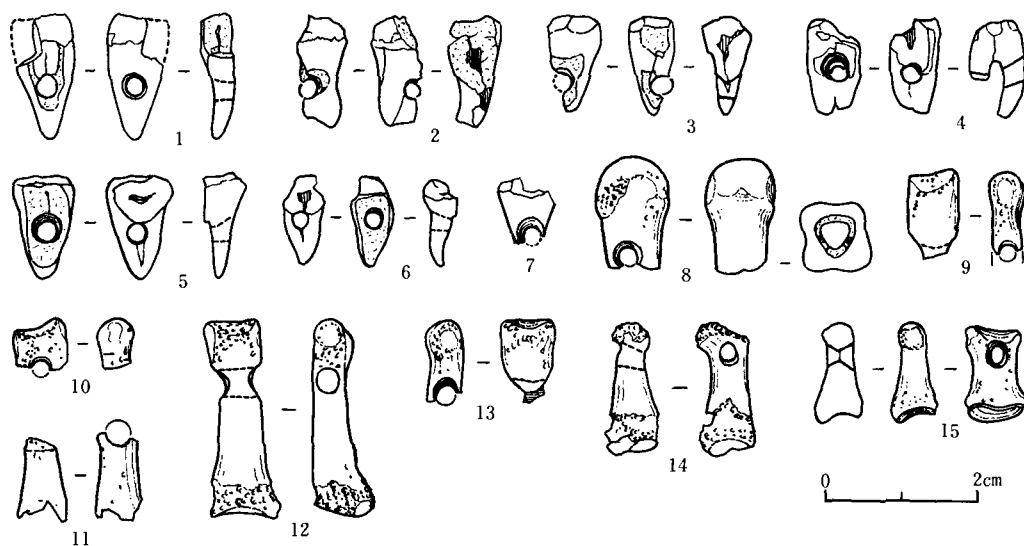


図11 福島県根古屋遺跡の人歯・骨製装身具〔馬場ほか 1986 b〕と諸遺跡での手・足の骨の利用部位

表3 再葬墓の人骨遺存例(一部)

千葉県岩名天神前遺跡〔杉原・大塚 一九七四〕、弥生Ⅲ期	
1号墓	壺二個(+2号壺の蓋にした壺破片一個)のうち、 1号壺内に左脛骨(男性、成人) 2号壺内に前頭骨の一部、左右膝蓋骨、左尺骨(女性、成人) 壺八個のうち、 2号壺内に頭骨片(性不明、成人) 4号壺内に多量の骨粉 5号壺内に右上腕骨、右脛骨片(男性、成人) 3号墓 壺二個(+2号壺の蓋にした壺破片一個) 2号壺内に骨片 4号墓 壺一個のうち、 1号壺内に骨片 5号墓 壺一個(+1号壺の蓋にした壺破片一個)のうち、 1号壺内に骨片 7号墓 壺一個(1号壺の蓋にした壺破片一個)のうち、 1号壺内に寛骨片
埼玉県上敷面遺跡〔蛭間ほか 一九七八〕、弥生Ⅲ期	
1号墓	2号壺内に歯九個(上左I <sup>1</sup> 、下右P <sup>1</sup> 、P <sub>2</sub> 、M <sub>1</sub> 、M <sub>2</sub> 、M <sub>3</sub> 、左I <sub>2</sub> 、P <sub>2</sub> 、M <sub>1</sub> )
2号墓	4号壺内に上腕骨か橈骨または尺骨か腓骨片(性不明、成人) 5号壺内に四肢骨片、歯五個(上右I <sup>1</sup> 、I <sup>2</sup> 、M <sup>1</sup> 、下左I <sub>2</sub> 、右M <sub>1</sub> )
茨城県殿内遺跡〔杉原ほか 一九六九〕、弥生Ⅰ期	
1号墓	壺内に歯一個(下左M <sub>1</sub> ) (性不明、二〇歳前後)
8号墓	壺内に軀幹骨、中手骨 筒形土器内に頭蓋骨片、下顎骨片、歯一個(上左I <sup>1</sup> ) (男性、三〇歳前後)
9号墓	壺内に歯二個(上左M <sup>3</sup> 、下左I <sub>2</sub> ) (性不明、二〇歳代)
10号墓	壺内に歯七個(上左M <sup>1</sup> 、M <sup>2</sup> 、右P <sup>2</sup> 、M <sup>1</sup> 、M <sup>3</sup> 、下左M <sub>1</sub> 、M <sup>3</sup> 、下左M <sub>1</sub> 、

M<sub>3</sub> (女性、三〇歳前後)

栃木県出流原遺跡〔杉原 一九八二〕、弥生Ⅲ期	
7号墓	壺五個のうち、 4号壺内に人骨片 11号墓 壺一個のうち、 10号壺内に下右M <sub>3</sub> 、下左M <sub>1</sub> 、M <sub>2</sub> 、M <sub>3</sub> 11号壺内に人骨片 20号墓 壺四個のうち、 墓坑内に焼人骨片、二次的散乱か 26号墓 壺破片一個、墓坑内に人骨片、二次的散乱か
福島県牡丹平遺跡〔小片ほか調査〕、弥生Ⅰ期	
壺内に頭蓋骨の一部、下顎骨、頸椎・胸椎・腰椎・肋骨の一部、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨一個、基節骨一個、大腿骨、右脛骨、右腓骨	
福島県根古屋遺跡〔馬場ほか 一九八六a〕、弥生Ⅰ期	
1号墓	2号棺(壺)内に頭骨片二個、一センチメートル大、〇・四グラム
2号墓	4号棺(壺)内に左脛骨片、長管骨片三個、八グラム 1号棺(壺)内に頭骨片三〇余個、四肢骨片一〇〇個以上、三〇七グラム
3号墓	2号壺内に橈骨片・尺骨片など四肢骨片四個、不明骨片五個、八グラム 3号壺内に頭骨片約二〇個、椎骨片、大腿骨二個、腓骨片三個など四肢骨片二〇個余、一二〇グラム 4号壺内に頭骨片三個、四肢骨片一〇余個、一三グラム 5号壺内に頭骨片二個、上腕骨・脛骨など四肢骨片一〇余個、一九グラム
4号墓	1号棺(壺)内に頭骨片三個、不明骨片二〇個、一八グラム
5号墓	1号壺内に頭蓋骨片・下顎骨片八個、椎骨など二〇個、二三グラム
6号墓	二号棺(深鉢)内に頭骨片三〇個、環椎など椎骨片四個、肋骨片一〇個、右第一中足骨、足の第一基節骨、長管骨片多数、一八五グラ

- ム、男性
- 3号棺内に頭蓋骨・下顎骨など頭骨片一〇個、椎骨片、四肢骨片一〇個、八五グラム
- 7号墓  
1号壺内に頭骨片数個、その他二〇個、二八グラム  
5号壺内に頭骨片約一〇個、胸椎椎体片、寛骨片、左第一中手骨片など一〇〇個以上、九四グラム
- 8号墓  
1号棺（甕）内に頭蓋冠片二・五センチメートル大一個、二グラム  
2号棺内に下顎骨三個体分など頭骨片九個、その他二〇余個、七三グラム、五歳前後一、性不明成人二
- 10号墓  
1号棺（鉢）内に長骨片四個、不明二個、七グラム（土器は小破片で蓋？）  
2号壺内に前頭骨片一個、その他一〇個、一七グラム
- 11号墓  
2号棺内に頭骨片三個、その他七個、四グラム
- 12号墓  
1号壺内に四肢骨片十数個、一六グラム  
5号棺内に頭骨片二個、四グラム
- 13号墓  
1号壺内に頭骨片二個、三グラム  
2号壺内に頭骨片五個、上下顎骨片数個、手足の骨片五個、五八グラム
- 14号墓  
1号壺内に頭骨片一〇個、舟状骨一個、中手骨一個、手基節骨一個、足基節骨一個、坐骨片・大腿骨片など約一〇個、六四グラム
- 15号墓  
4号壺内に頭骨片一個、腓骨片など四個、一二グラム  
5号壺内に頭骨片六個、上下顎骨片、上腕骨片、尺骨片、脛骨片など十余個、三五グラム  
6号壺内に頭骨片など四個、七グラム
- 16号墓  
1号壺内に四肢骨片数個、三グラム  
2号壺内に頭骨片六個、鎖骨片、脛骨片など五〇個、三七グラム  
3号壺内に頭骨片二個、ほか二〇個、一四グラム  
4号壺内に全身各部片二百余個、二一四グラム、五歳位一、少年一、成人二  
5号壺内に頭骨片数個、胸骨片、大腿骨片、脛骨片など二〇個、三三グラム  
6号壺内に頭骨片四個、寛骨片、腓骨片、手中節骨片など二十余個、

二六グラム

19号墓

- 1号壺内に頭骨片数個、手舟状骨片など数十個、二〇グラム  
2号壺内に大腿骨片など二個、二グラム  
3号壺内に頭骨片一四個、下顎骨片など全身各部片三十余個、一〇八グラム

4号棺（壺または甕）内に全身各部片百余個、小児一、成人一

5号棺（甕）付近に頬骨片など全身各部片百余個、三七〇グラム、男一、女か少年一

20号墓

- 1号棺内に尺骨片一個、一〇グラム、女性一（1号土器は蓋として使った鉢であるから、身は2、3、4号土器のいずれか）

21号墓

- 1号壺内に頭骨片十個未満をはじめ全身各部片数十個、二二六グラム、少年か女性一

八束脛洞穴は、おそらく遺骸の解体、選骨、残余の骨の処分にもつぱら使われた場所であって、壺棺に再葬した墓地がおそらく山の麓の平地のどこかに埋もれているのであろう。

なお、再葬墓とはいふものの、再葬墓から人骨が出土した例は少ない。人骨は、生の状態だと貝塚や石灰岩地帯でないとのこりにくい。それに對して、人骨は焼いて炭化すればよくのこる。したがって、再葬墓に人骨が遺存していた例が少ない理由は、焼いて炭化した人骨が少なかったために、消滅したと考えるのが自然である。すなわち、再葬されたのは生骨が多かったことを暗示しているのであろう。そして、初葬時の墓穴がつねに見いだされるのではないこと、遺体の軟部が十分にのこっている状態で解体したと判断できる例があることから推定すると、初葬は土葬の過程を経ないばあいも存在したのであろう。

ところで、表3の人骨の遺存例を通覧すると、特定の骨への偏りがな

骨・四肢骨からすべての部位にわたっている。おそらく人骨のどこか一部を埋葬すればそれでよいのであって、特定の骨でなければならぬといったものではなかったようである。これは、骨がすでに原形をとどめないほど小破片化していることも無関係ではないであろう。

**壺棺を土坑に埋める** 再葬墓では、一基の土坑に埋められた土器に時間的な型式差が存在する例があることが注意されている。そこで、工案善通は「一つの墓穴で、家族および近親者の改葬を、同じ時点でもととりはからっている可能性」があると考え、「さらに同族間で墓地を形成していること」を特徴として挙げる〔工案 一九七〇…三五～三六〕。

須藤隆は、土坑内に一括埋められた土器が多様である点について、「異なった土器製作技術の伝統を持つ複数集団が、この二次埋葬を行う集団に一次的にせよ包括される結果、多様性が生じた」と理解されるべきか、土器に納骨する時点がそれぞれ異なり、集積された納骨土器が最終的に一括して埋設されるため、それ程大きな時間差ではないにしろ、そのズレが土器の上の差異となったのか、あるいは両方の要因がからみあっているのか、いくつかの可能性が考えられる」という〔須藤 一九七九…一九〕。工案から教示をうけた田中琢も、「最初の死者から順に遺体を骨化させ、一人分を一個の土器に納め、ひとまず保管しておく。死者がでるたびに納骨土器は増えていく。そして、やがてその構成員が死に絶えたとき、まとめて土中に埋めたのだ。この最初の納骨から最後の一括の埋葬まで、納骨土器を保管するのだから、納骨土器に破損を修理した痕跡が少なくないこともわかる」と説明する〔田中 一九九一…一四～一一〕。

六。

須藤はその後、福島県会津若松市墓料遺跡の8号墓出土の8号土器（大洞A式）と4～7号土器（大洞A'式）を例にあげて、「一括埋納される土器がかなりの時間的な幅の中で集積されたことを示唆している」と述べている〔須藤は編 一九八四…六九〕。福島県根古屋遺跡の時期差が存在する土器群を一土坑に埋納した例について、報告者の大竹憲治は、「いずれの墓坑内においても収納土器の編年に落差があることから一つの再葬墓が形成された墓坑にさらに追葬が行なわれたことも考えられる」といい、1号墓の4号土器、6号墓の2号土器を「供献された状況でのきわめて新しい段階の土器」と評価している〔梅宮・大竹編 一九八六…八八〕。しかし、6号墓2号土器は小型の鉢で、墓坑の上から出土したものであるから、その帰属はやや不安定である。根古屋遺跡の土器を再検討した設楽博己は、根古屋遺跡では「多数の土器を一括埋納した土坑に新しい土器が混じる傾向」があることを指摘しているが〔設楽 一九九一…二六～二七〕、そのことを強調はしていない。設楽がその例として挙げた8号墓の土器群に伴った鉢形土器（5号）も、これだけのことであれば、地表に露出して蓋が失われていた棺（7号）に、後の時期に蓋をしたとも考えうる。人骨を遺存した壺が一括出土した事例が稀であるために、一個の壺に一人分の骨をいれるのが原則であったのか、それとも一人分の骨を数個の土器に分けて納めることがあったのか、明らかでない。この問題は再葬の本質に直結するので、今後とも、人骨を伴う資料の詳細な分析をまっぴらして検討すべき重要な課題である。

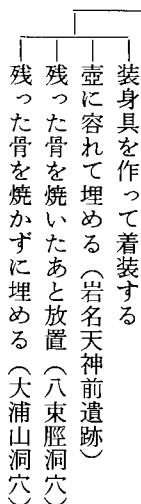


## 遺骸の解体者

鈴木尚は、大浦山人骨の解体法が猪など獣類のそれと一致することを人肉食の根拠として強調している〔鈴木一九八三…一六一～一六六〕。その解体者が、狩猟をおこない獲物を解体する仕事に従事していた男性であったことは、まちがいあるまい。しかし、それにしても、人の遺骸を巧みに解体し、歯や骨を取り出し、のこった骨を処理する専門家がいたのではないだろうか。その人物がその集団の首長でなければならぬとまで考える必要はないが、ある人物がもっぱらそれに当たるといふことはあってもよいのではないか。そして、壺棺内に遺存していた骨が特定の部位に限定されていないにもかかわらず、ごく一部の骨にとどまるのは、なんらかの手続きを経てごく一部の骨を選んでいける可能性がある。司祭者なり呪術師なりによって再葬の過程は管掌されていたと考えられるのである。しかしながら、再葬のもつ社会的意味を重視するならば、再葬の諸過程、特に選骨には、死亡者の親族が立ち会ったことは確かであろう。

**再葬の過程** 以上の説明を、再葬の過程におきかえると次のようになりう。

死亡—(土葬—発掘)—解体—(煮る—焼く)—骨の一部を取り出す—



すなわち、岩名天神前遺跡、八束脛洞穴、大浦山洞穴は、それぞれの

過程を代表する遺跡である。早くから問題にされてきた群馬県岩櫃山鷹ノ巣岩陰は、八束脛洞穴と共通するその特異な立地からすると、遺骸の解体の場を二次的に壺棺再葬の場に転じたものと考えらるべきであろう。しかし、選骨前にまたは選骨後に残された骨の処理にあたって火葬の採否があるように、すべての集団が、まったく同じ過程を踏んで再葬をおこなったのではなく、いくらかの差異があったことはいうまでもない。

## 一一 再葬墓地をのこした集団

### 再葬墓の土器

再葬墓が墓であることを初めて確認した杉原莊介は、岩櫃山鷹ノ巣岩陰の報告で、一土器一人の埋葬を考えた〔杉原一九六七…四三～四四〕。その根拠は、千葉県岩名天神前遺跡の1号墓で、1号壺から男性、2号壺から女性のそれぞれ一部の骨を検出したところにあった〔杉原・大塚一九七四…一四～一五、一九～二〇〕。では、一墓坑に一個の壺を納めた栃木県出流原遺跡11号墓には、一人分の人骨を再葬していたのであろうか。疑問なしとしない。

再葬墓の土器は、壺が圧倒的に多いが甕もある。しかし、この甕は壺の蓋として使っているようであって、他に浅鉢や壺の破片も、しばしば蓋として用いている。したがって、土器として総数だけを取り上げることは意味がない。再葬墓の土器は、骨を容れる容器、それを覆う蓋、供物をのせるまたは容れる容器に分けて分析を進める必要がある。そのようにみれば、たとえば鷹ノ巣岩陰B群は壺二個、甕二個であるが、容器

としては二組になり、C群も壺五個、甕一個、小壺一個、小鉢一個であるが、容器としては三組に減る。

いくつかの遺跡で一墓坑あたりの土器数をみよう(表4)。ここで注意されるのは、土器の個数の多い例も少なくないけれども、壺一個だけの例も少なくないことである。つまり、蔵骨器としては壺一個でことたりたわけである。このことは、東海地方では再葬は一基の土器でおこなわれることを原則としていた事実からも了解しうる。縄文・弥生時代には同時に死亡した人を合葬する習俗がしばしばあったから、杉原が根拠とした岩名天神前1号墓のばあいは、合葬とみなすこともできる。

問題は、一基の土坑内から出土した複数の壺のうち、あるものには骨

表4 再葬墓出土の土器数

1個	2個	3個	4個	5個	6個	7個	8個	9個	10個	11個	12個	13個	14個	
三基	二基						一基							岩名天神前
														岩櫃山
			一基	一基					一基					沖Ⅱ
一五基	九基	三基												女方
	八基	七基	七基	八基	六基	二基	二基		(一基)					出流原
									一基					村尻
一一基	五基	六基	五基	二基	二基	一基								根古屋
一基	四基	四基		一基	一基									
二基	五基	五基	二基	四基	二基		一基		一基		一基	一基	一基	

がのこり、他のものには骨がのこっていなかった例をどう考えるかである。例えば、出流原遺跡11号墓の壺一個のうち人骨がのこっていたのは二個、根古屋遺跡21号墓の壺五個のうち人骨がのこっていたのは一個だけであった。のこりの土器は人骨が消滅してしまったのか、それとも納骨とはちがう機能をもつ壺であったのか。その一方、一土坑内の複数の壺に骨がのこっていた例は根古屋遺跡から一例検出されている。しかし二〜四個体分の人骨の混在が確認された8号・16号・19号墓の三例以外のそれぞれが、別個体の人骨に属するという証明はまだなされていない。また、複数個体の三例はいずれも一個の壺に納めてあったから合葬墓としての性格がよく、他まで敷衍することはできない。一個の壺に納めている人骨は全体のごく一部で、しかもその量は少ないから、一個体の人骨を複数の壺に分納している可能性がないとはいえないのである。

壺は蔵骨器であるというだけでは説明しつくせないということであれば、何も容れていない壺を埋めるのは不自然であるから、壺のなかには腐朽質のものがはいっていたのではないかと考えるのも一案である。この点に関して、出流原11号墓で管玉を容れた土器と人骨を容れた土器が別であったという事実、示唆的である。

壺が蔵骨器でなかったことを明示するのは、長野市塩崎遺跡の弥生Ⅱ期(庄ノ畑式)の木棺墓である「矢口編一九八六」。21号墓では、細頸壺など一〇個の土器が、木棺の上においてあった(図12)。一見して再葬墓の名残りであることを思わせる。遺体は棺内に埋葬されていたから、このばあいの土器は蔵骨器ではありえない。飲食物の容れ物として用い

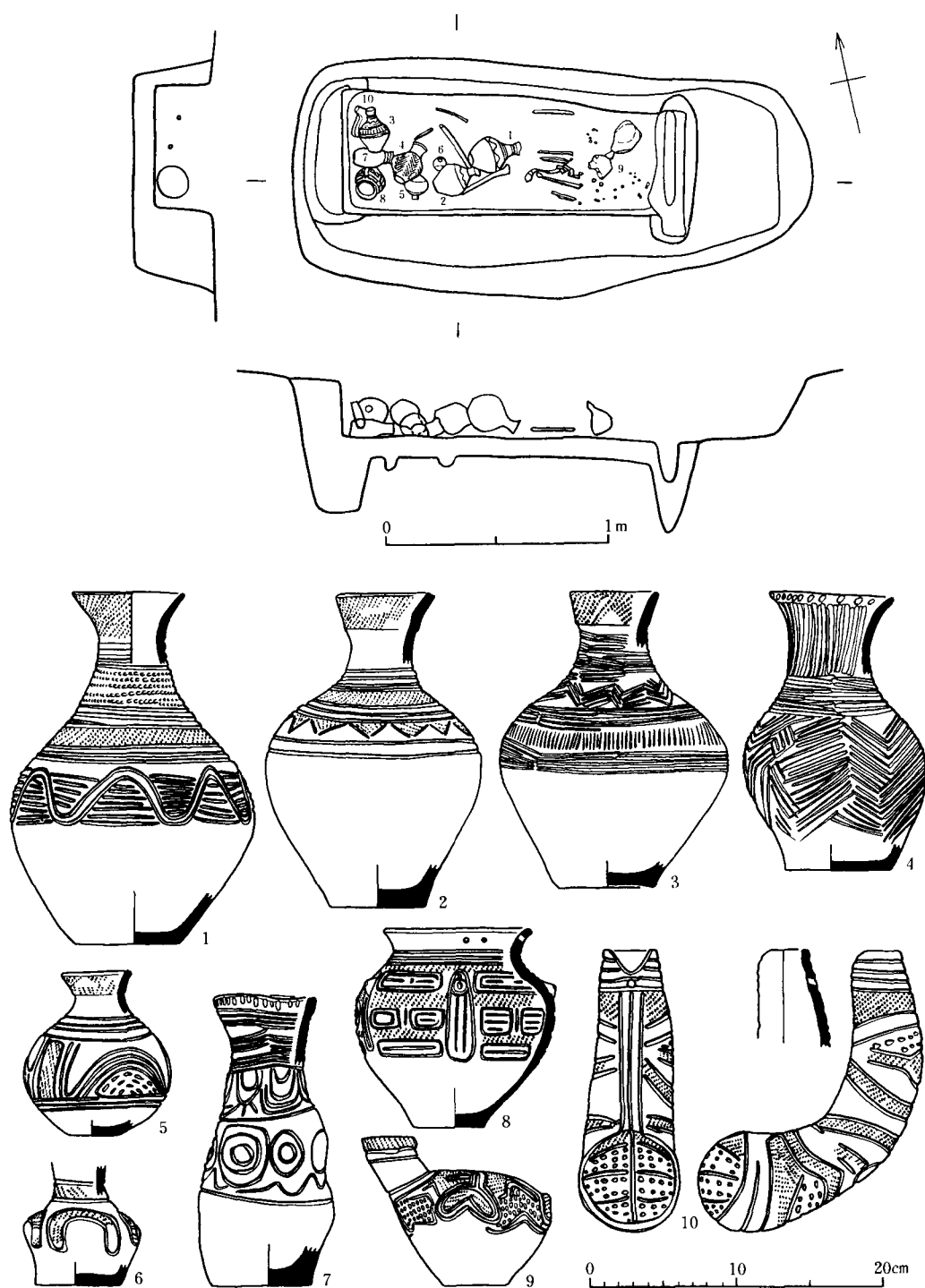


図12 長野県塩崎遺跡21号木棺墓の土器出土状況〔矢口編 1986〕

られたと考えるほかない。この例から逆推すれば、再葬墓の壺のなかにも飲食物容器が含まれている可能性があるということになる。すなわち、再葬墓の墓坑には、米や酒を容れた壺と人骨片を容れた壺がいっしょに納められていたと推定しうる余地がある。このように考えてくると、今度是一个の壺に容れた骨の量もまた少なすぎることに基づく。実は、人骨片も、もともとは米または酒のなかに容れてあったのであろうか。

このように、一基の墓坑から土器が多数発掘されたとしても、ただちに被葬者が多かったとは考えずに、死者に対して捧げられた飲食物が多かったか、または葬送儀礼でたくさん飲食物が消費された、というように、死者の社会的な地位が相対的に高かったことも考慮しておいたほうがよいのかもしれない。そうであれば、再葬墓のなかに含まれている外来系の土器なども、死者の出身集団からはるばる運んできた飲食物の容器であったと考えることもできよう。

**再葬墓地の群別** 墓地の群別作業は、土器型式、空閑地、土器数、管玉数、顔壺を伴う墓などを指標にしておこなう。

栃木県出流原遺跡〔杉原一九八二〕は、再葬墓地が広く調査された遺跡である(図13)。しかし、それでもまだ墓地の範囲は調査範囲外まで広がっているようにみえる。発掘範囲内は墓の密集状況からおそらく四群からなると推定する。杉原の土器の型式分類を用いると、第二類(最古)の土器を出土した墓は、I群8号、15号、II群18号、III群22号、IV群不明、第一類A(古)の土器を出土した墓は、I群23号、II群1号、14号、III群11号、IV群34号、第一類B(新)の土器を出土した墓はI群、

II群、III群、IV群のいずれにも存在する。したがって、IV群で第二類の土器を出土した墓がはつきりしない(26号、33号の土器の型式は不明)が、I～IV群は、同時に併行して形成されたものとみてよい。各群の規模はI群一基、II群八基、III群九基、IV群九基である。出流原遺跡は完掘されているとはいえないので、何群で形成されているかは明らかでない。しかし、弧状に曲がる墓の分布状態から四群よりも多いことは推定して誤りないだろう。

管玉の数と土器の量との関係を見ると、玉八個・土器七個(2号墓)、玉七・土器一一(11号墓)、玉五・土器四(36号墓)、玉四・土器一(6号墓)、玉三・土器三(23号墓)、玉三・土器一(10号墓)のような例と玉〇個・土器六個(22号墓)、玉〇・土器五(7号、13号墓)、玉〇・土器四(18号、20号、24号墓)のような例がある。ただし、玉が皆無の22号墓は本遺跡最古であり、13号墓は五個の土器のうち三個は小片、二個は大きな破片であるから実態は一個の棺の身と蓋の可能性も考慮しておく必要がある。概して、管玉の数と土器の量との間には相関関係が認められるといえよう。

出流原遺跡の11号墓から出土している人面付きの壺形土器は、他の再葬墓地でも一、二個はどうか発見されない特殊な土器である。佐原眞は人面を「死者の霊安からんことを祈って表わした祖霊の顔でもあろうか」といい、この土器は「集落の長などの骨を納めるのに特に用いたとも想像できる」と述べている〔佐原一九七六：第一九図〕。出流原遺跡では、他に、人面付き土器に付いている左右の耳と同じ表現をもつ壺形土

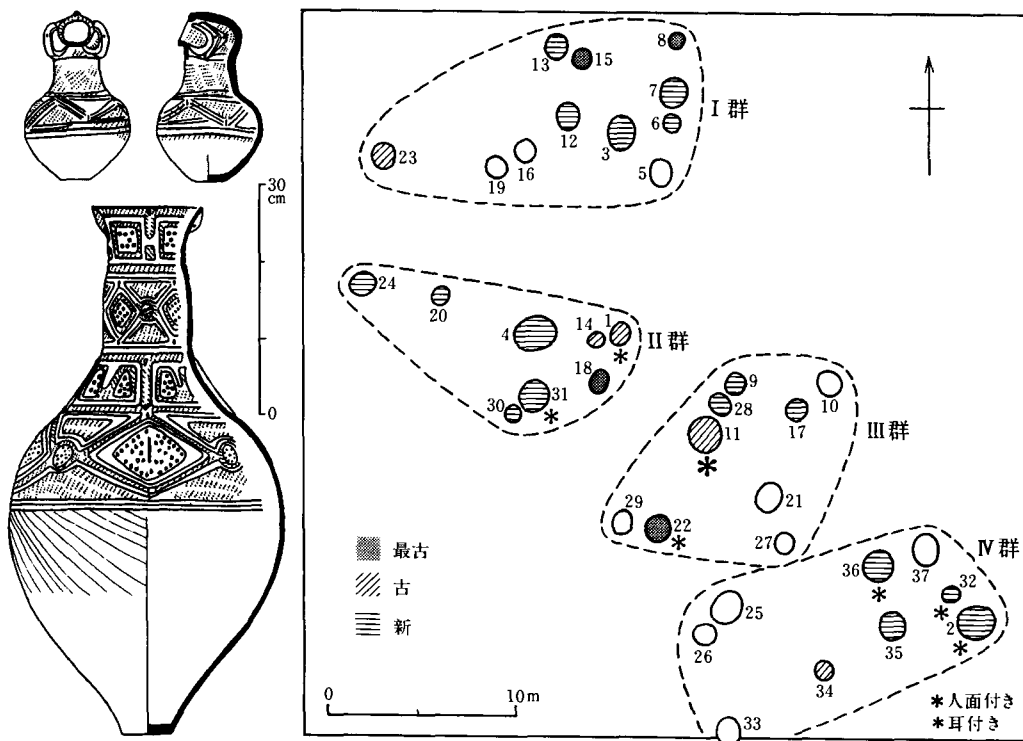
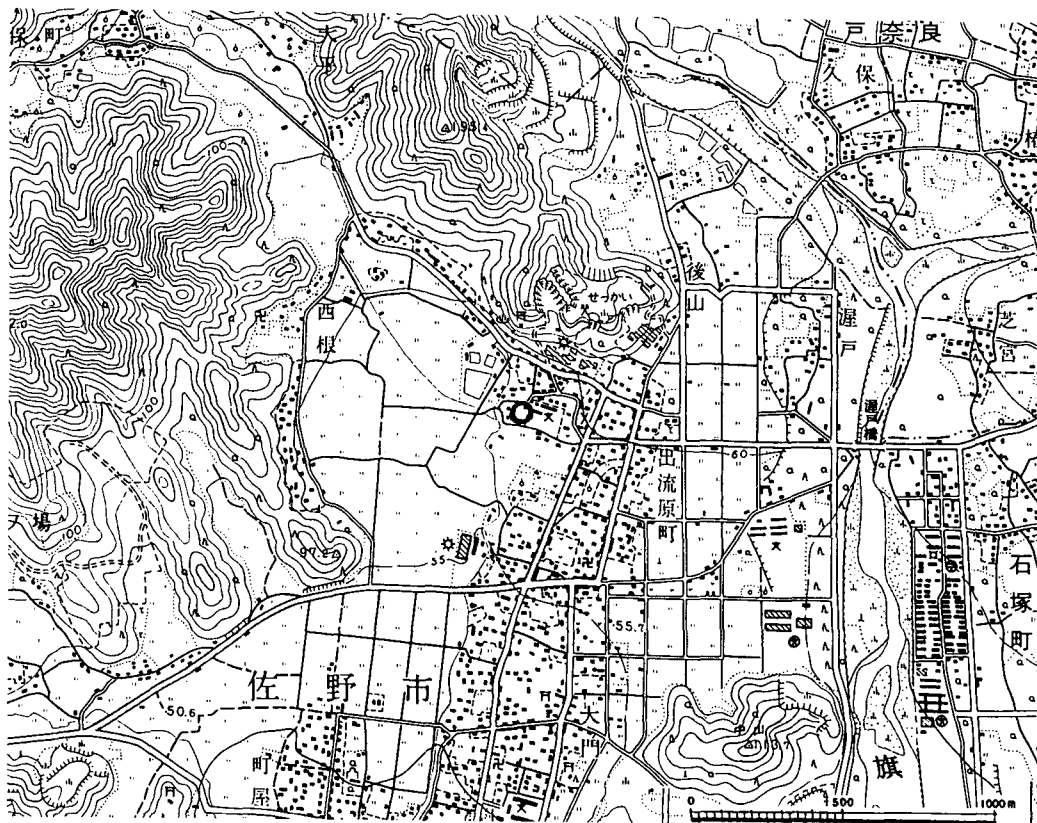


図13 栃木県出流原遺跡の立地、人面付き土器・耳付き土器、再葬墓地の群別〔杉原 1981から作成〕

器が、1号、31号、22号、36号、32号、2号の六基から各一個ずつ出土している。いずれも杉原らの編年の第一類Bに属しており、人面付き土器の退化形態とみてよい。この土器も、群別の指標となろう。これらは、1号・31号がII群、22号・11号がIII群、36号・32号・2号がIV群におさまリ、I群にはこれを欠いているものの、平均的である。

群馬県沖II遺跡〔荒巻・若狭ほか一九八六〕は、再葬墓地全体を完全に発掘調査した稀有な例である。墓地は約四メートル離れて大きくA、Bの二群からなっている。報告者は、さらにA群をA1群一二基とA2群四基に、B群をB1群五基、B2群三基、B3群二基、B4群一基に細分している〔同前二七〇～二七一ほか〕。A1群はおそらくさらに二群に分かれるのであろうが、その境界は明らかでない。結局、この遺跡ではおおよそ三～六基からなる再葬墓が六群ていど存在することになる。この遺跡では、土器棺を納めていない土坑を初葬の土坑とすれば、その初葬墓と再葬墓が重複して分布している。しかし、初葬の土坑と再葬墓の小群との対応関係は、大きな群ではとらえられるが、小群でははっきりしない。A群付近の土坑は一九基、B群付近の土坑は少なくみれば五基、さらに東のものまで数えると二三基となる。A群が初葬・再葬とも一箇所に密集しているのに対して、B群は初葬・再葬とも散漫に分布している。棺として用いた壺と甕を細かく分析した結果でも、A群とB群とは明瞭に分かれている〔荒巻・若狭ほか一九八六～二七五～二七六〕。A群の被葬者とB群のそれとの間には、何らかの区別がなされているとみるべきであろう。

群馬県岩櫃山鷹ノ巣岩陰〔杉原一九六七〕では、五群確認されている。そのうち二群はそれぞれ一個の土器の単独出土であって、時期はI期末に属する。土器五個のA群、土器四個のB群、土器八個のC群の三群はII期に属する。岩名天神前遺跡例を参考にすれば別であるが、合計五人を大幅に超えることはないと思われる。すなわち、このばあいの五群というのは、出流原遺跡の一群に相当する程度の小規模のものである。

福島県根古屋遺跡の再葬墓地〔梅宮・大竹編一九八六〕は、発掘範囲内を墓の分布の疎密から、三群に分けることができる(図14)。これを設楽博己による出土土器の編年にもとづいて検討してみよう。設楽は、1群土器(I期)と2群土器(II期)に分け、前者をさらに古い段階、中ごろの段階、新しい段階に細分している〔設楽一九九一〕。この分類案に従うと、以下のようになる。なお、2群土器はいずれも追加である。

	I 群	II 群	III 群
I 期 (古)	四十二基	三十四基	二基
(中)	一基	一十一基	—
(新)	三基	二十二基	—
II 期	一基	一基	—

III群は発掘区のさらに西側に広がっている可能性がある一方、I群、II群ともに墓の位置が新しくなるにつれて東から西または西南方向へと移動していく傾向にある点を考慮すると、III群は1期中段階にII群から派生していった可能性も考えられよう。

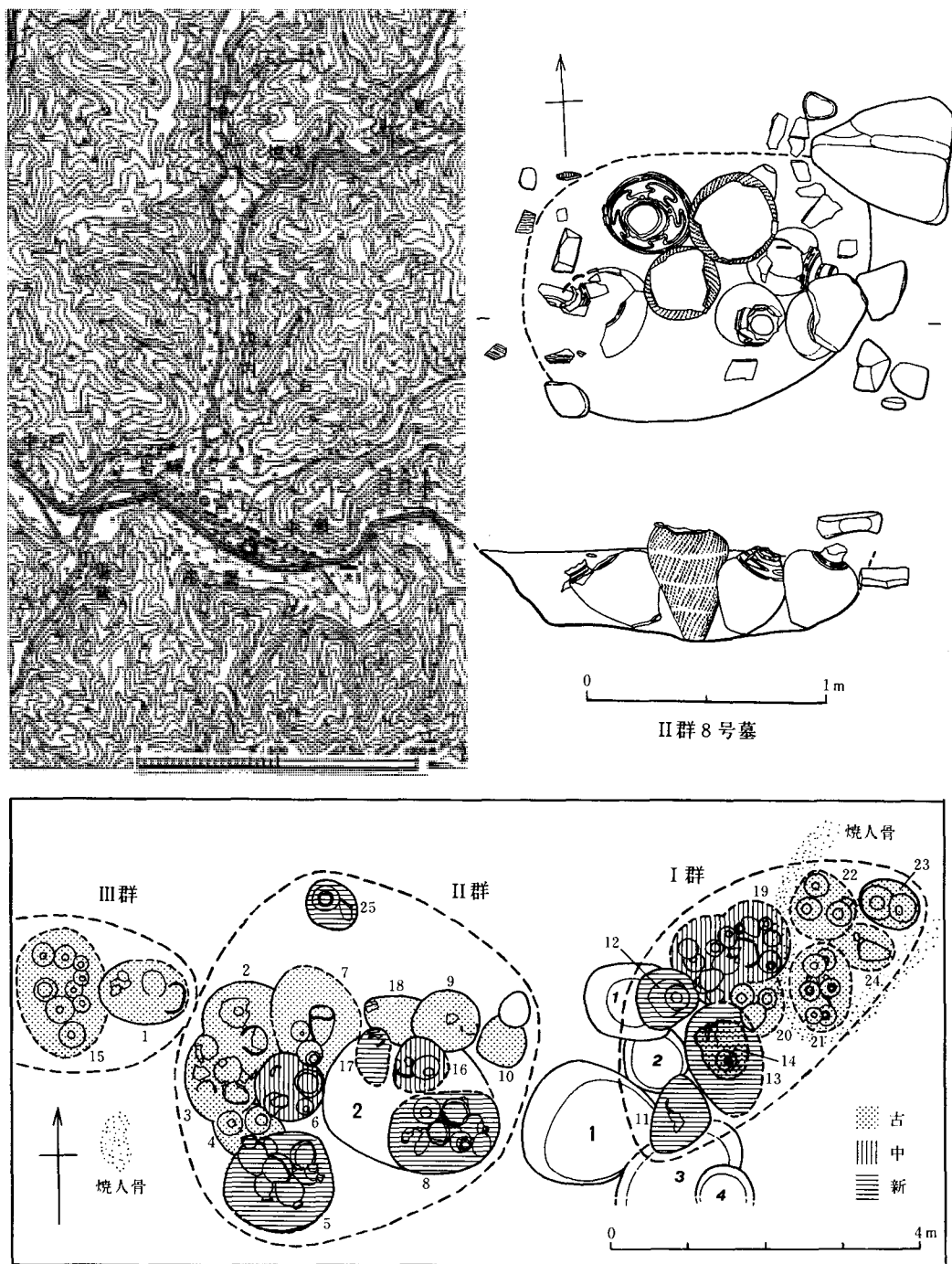


図14 福島県根古屋遺跡の立地、遺構、再葬墓地の群別  
 [梅宮・大竹編 1986]・[設楽 1991から作成]

茨城県小野天神前遺跡〔阿久津 一九七七〕は、すでにいくつかの群別案が提出されているが、これまでの分析例からすると、三群に分けるとができるのではないかと思う。おそらく発掘区の南側に墓地はさらに広がっているであろう。

新潟県村尻遺跡〔関・石川ほか 一九八二〕は、二、三群であって、発掘区の東側にさらに続きが埋もれているのであろう。

千葉県岩名天神前遺跡〔杉原ほか 一九七四〕は、再葬墓七基が発掘され、その後さらに近くから伸展葬の人骨一体が発掘されたというが、両者の関係は不明である。基数が少ないので判断が難しいが、あえて分ければ2号、3号、7号からなる北群と、1号、4号、5号、6号からなる南群の二群になる。しかし、北群の三基は相互に離れており、バラバラに分かれる可能性もないとはいえない。

**造墓の単位** 再葬墓地は、広く発掘された沖Ⅱ遺跡では六、七群、出流原遺跡では四群以上からなると推定した。では、各群は何を反映しているのだろうか。

田中琢は、「一つの土坑のなかにそれぞれ別の人の遺骨をいれた複数の個の納骨土器が埋められていること」、「一つの土坑のなかにある複数の土器にわずかながら古くつくられたものと新しく作られたものが混在している場合がある」ことを前提にして、「基礎になっていた人間集団の単位を構成する複数の人物が死に絶えたのちに、まとめてかれらの納骨土器を埋めた」と考える。その構成員とは、「一回の成年式に参加した人たち」からなる「年齢集団」であり、したがって「死後も家族や親族の

墓に埋められることなく、年齢集団の単位で墓に納まる」と主張する。したがって、この集団は当然、性別の集団でもあるから、一基の土坑内の二棺から男女の骨が出土した岩名天神前遺跡1号墓の性の判定には誤りがあると「確信」することになる〔田中 一九九一・二四〇・一一七〕。

しかしながら、一基の土坑内の棺から明らかに世代を異にする人骨が検出された例がある。福島県根古屋遺跡8号墓の2号棺には成人骨二体分と五歳前後の一体分が納めてあったし、同16号墓の4号棺には五歳くらいの一一体分、少年一一体分、成人二体分が納めてあった。また、同19号墓の4号棺も小児一体、成人一体であり、同19号墓の5号棺付近には男性一一体分と女性または少年一一体分が散布していた。したがって、複数の土器をいれた一基の土坑の内容を、年齢集団の原理で説明するのは無理がある。一土坑あるいは一棺に納められる人骨は、成人男女と幼小児の組合せがありうるのである。

一基の土坑内の壺に一人分にせよ、数人分にせよ、人骨が納めてある。そして、土坑が数基集まって一小群をつくっている。出流原、沖Ⅱ、根古屋遺跡などの再葬墓地のこのようなあり方はむしろ、埋葬法こそ変化しているが、埋葬小群六ないし八個を環状に配列した縄文時代の墓地構成によく似ている。そこで私は、数十基からなる再葬墓地は、基本的に一集落による造営と推定し、個々の小群は、世帯を表現すると考える。そして、一基の土坑内に複数の人が埋葬されていたとすれば、それは縄文時代にしばしばみられた合葬的な性格をもつものと理解しておきたい。根古屋遺跡もおそらく一集落を単位とする墓地の一部を発掘したのであ



ろう。なお、出流原遺跡Ⅳ群のように、管玉多数をもつ墓が多い埋葬小群は、特別な世帯の存在を示唆するのであろう。

問題は、岩名天神前遺跡や岩櫃山鷹ノ巣岩陰のような遺跡全体で一、二群だけ検出されているようなばあいである。これらも、同じ遺跡内の別地点にまだいくつもの世帯の墓群が存在すると予想するのか、それとも一群が即一集落を反映しているのか。岩櫃山遺跡のばあいは、近接して幕岩岩陰があり、そこからも人骨が出土しているから、もし鷹ノ巣岩陰を一世帯の墓群とすれば、幕岩その他の岩陰とあわせて一集落の墓地として完結することになる。岩名天神前遺跡のばあいは、むしろ一集落の墓地であるが、墓地が形成途上で終わってしまったために、基数が少なく、群別も十分に行えなくなったと考えるのも一つの解釈であろう。

## 三 再葬制の系譜

**再葬の分布** これまで報告された東日本の弥生時代の再葬遺跡は一〇〇箇所を超すが、その分布範囲が縄文晩期の浮線網状文Ⅱ水Ⅰ式土器の分布圏とほぼ一致していることは明らかである。人の歯・骨製の特殊な装身具の分布は、長野県・福島県まで広がっているが、この事実は、長野県・新潟県・福島県を共通の葬制の広がる地域として把握が可能なことを示している。

設楽博己は、再葬墓の土器の数に着目して、東日本の弥生Ⅰ期の再葬墓を、単数壺棺墓と複数壺棺墓に類型化し、前者は愛知県を中心とする

東海地方に、後者は福島県を中心とする東北地方南部に発生源があつて四周に拡散していった可能性を指摘している。ただし、群馬県渋川市南大塚遺跡の複数壺棺墓がⅠ期（樫王式—大洞A式）までさかのぼる可能性を想定しているから（設楽一九八八a・b）、死者に飲食物を捧げる、あるいは葬送儀礼を盛大におこなうのは、関東地方北部から東北地方南部で発生し関東地方でもっとも発達したことになる。死者の歯骨を抜き取ることがさかんにおこなわれたのも、火葬をしばしば伴っているのも、同じ地域であつた。しかし、福島県根古屋遺跡や牡丹平遺跡出土の人骨にのこされた抜歯の4Ⅰ型は、縄文晩期の東北地方にも信越地方にもほとんど存在しない、明らかに東海地方西部以西の要素である。根古屋遺跡をのこした集団は、東海地方西部との関係なしに成立したとは考えにくいのである。

では、東日本再葬墓の源流はどこに求められるのであろうか。縄文晩期までさかのぼって検討してみよう。

**縄文晩期の再葬** この時期の再葬墓は、表5に示すように、愛知県・新潟・福島県の範囲から少なからず発見されている。

縄文晩期の再葬には二つの葬法がある。一つは、遺体を火で焼いて細片化したあと、石を集めてつくった囲いのなかに、人骨の細片の一部を再葬する方法である。信越地方に特徴的にみられ、遺体を焼いた炉跡は新潟県青海町寺地遺跡（寺村ほか編一九八七）で、人骨を再葬した石囲いは長野県伊那市野口遺跡（林一九八三）で典型的にみられる（春成一九八八・四一三—四一五）。もう一つは、遺体をいったん土葬したあと、

表5 縄文晩期の「再葬」遺跡の諸例

福島県三貫地	一四個と九個の頭骨を円形に並べ、残りの骨をその内側に集積	晩期前葉
新潟県寺地	円形炉内に焼骨、離れた位置に石棺墓	晩期前葉
長野県野口	火葬。再葬は石柩内に円形配石墓をつくり焼骨を二、三体分ずつまとめる	晩期前葉
長野県大明神	火葬	晩期前葉
長野県御社宮司	火葬	晩期末(水一式)
愛知県本刈谷	成人の甕棺葬	晩期中葉
愛知県伊川津	初葬は土葬。再葬も土葬	晩期前葉
愛知県吉胡	初葬は土葬。再葬は土葬または単独壺棺葬	晩期前葉→弥生Ⅰ期

掘り出して基本的にすべての骨をもう一度土葬する方法である。初葬とほぼ同じ姿勢をとらせて再葬した例は、愛知県渥美町伊川津遺跡から一九八四年に発掘された4号、12号人骨があり、四肢骨を方形に配列してその内部にのこりの骨をいれたいわゆる盤状集積葬の例も、愛知県渥美町伊川津、同町保美、田原町吉胡、西尾市枯木宮、刈谷市本刈谷、同市泉田宮東1号貝塚遺跡で知られている。人骨を遺存する墓地遺跡が愛知県に集中していることが大きい理由であろうが、すべて三河地方に分布の中心がある。そして、時期的には晩期でも初めに中心があることは、注意すべきであろう。

しかし、豊橋市麻生田大橋遺跡(安井編一九九二)で発掘された縄文晩期から弥生Ⅰ期(五貫森式→水神平式)の一〇二基に達する土器棺墓が、壺または甕を横に倒して埋めた通常の土器棺墓であったことから判断すると、弥生時代の壺棺再葬墓の源流が、東海地方西部にあった可能

性は後退する。

根古屋遺跡は火葬を普遍的におこなっているという点では、縄文晩期の信越地方とのつながりを想わせる。また、抜歯は、三河地方以西との関係を示唆しているし、壺棺のなかに混じっている遠賀川系土器も西日本との関係なしには説明不可能である。東北地方の複数壺棺葬墓は、縄文晩期の同地方の墓制からのみ発現したものではないことを確認して先に進みたい。

**再葬の終焉** 弥生Ⅰ→Ⅲ期に盛行した再葬がその後どうなったのかについての考察はこれまであまりなされていない。方形墳丘墓(周溝墓)に取って代わられたということと済ませているといえよう。

埼玉県小敷田遺跡からは、Ⅲ期後半(須和田式)に属する関東最古の方形墳丘墓(周溝墓)が、再葬墓と並存した状況で発見されている。

弥生Ⅱ期に属する長野市塩崎遺跡(矢口編一九八六)では、木棺墓に壺が多数伴っており、再葬墓が消滅した直後の有様を思わせた。木棺そのものは腐朽してのこっていなかったが、人骨は一八基にのこっていた。それらは、いずれも伸展葬であって、再葬ではなかった。

三浦半島では、大浦山洞穴から四キロメートル離れた位置に、Ⅳ期(宮ノ台式)に属する三浦市赤坂遺跡があり、さらに横須賀市蛭畑、上の台、逗子市持田遺跡がある。これらの遺跡はいずれも台地上に立地し、そのうち、蛭畑遺跡からは竪穴住居址二六軒と方形墳丘墓(周溝墓)五基が発見されており(浅川・河合一九八七)(図6)、他の遺跡も、方形墳丘墓だけでなく、環濠集落も備えていると予想される。大浦山洞穴もそ



図15 縄文晩期および弥生前・中期の再葬墓の分布 [図下は設案 1988 a をもとに作成]

れらと同じ時期に属する以上、それらの集落と無関係であったとは思えない。蛭畑遺跡の方形周溝墓の内部主体は、いずれも区画内から発見され、2号、3号墓では二基確認された。その規模は、長さ一・七メートル、幅〇・六〇・七メートルであって(河合英夫教示)、この時期の他の方形墳丘墓のそれと変わるところはない。なお、3号墓の溝内からは一基の壺棺が検出されている。蛭畑遺跡では、残念なことに人骨は遺存していなかったで、それが再葬墓であったか否かの証明はできていない。内部主体の規模は成人の伸展葬が可能であることを示しているが、規模の点だけで再葬を否定するのは危険である。

なぜなら古墳時代前期の茨城県東茨城郡磯浜町鏡塚古墳の後円部の粘土槨は長さ約一〇メートル、木棺の長さはおそらく約八メートルと推定されるが、埋葬遺骸はわずか三〇センチメートル四方の場所に、頭骨・臼歯・肋骨・寛骨片がまとめておかれていたにすぎなかった(大場ほか一九五六)。また、栃木県佐野市八幡山古墳では長さ二・五メートル、幅〇・三〇・五メートルの堅穴式石室のほぼ中央に成人男性骨一身分が一束にまとめて埋葬してあった(前沢一九五五)。関東地方の前期古墳には、このように通常規模以上の内部主体であっても、再葬墓という例は少なくない。こうしてみると、三浦半島では、あるいは三浦半島のみならず関東地方では、弥生中期には、再葬墓は新来の方形周溝墓と合体し、方形周溝墓の内部主体は再葬墓であった可能性があるのでないだろうか(春成一九八七・八二)。

火葬に関しては、群馬県高崎市新保田中村前遺跡で弥生後期の方形周

溝墓が問題である。ここでは、主体部から焼かれた成人の頭、足部、歯骨が出土し、その周囲の土が焼けていたことから、遺体を主体部内で直接焼いたと考えられている(平野一九八八・二〇)。

古墳時代の再葬制を示唆する例としては、長野県鳥羽山洞穴(関一九六七・永峯一九八二)が取りあげられている。この遺跡のばあいは、洞穴の床面の貼石上に五体以上の人骨をおき、また壁際には四肢骨を、薪を束ねたような状態においていた。貼石上には火を焚いた部分も数箇所認められた。報告者は、再葬墓とは断定していないが、その状況は再葬を思わせる。

古墳時代にも再葬が盛んにおこなわれたことを示す好例としては、千葉県四街道市物井古墳を挙げることができる(物井古墳発掘調査会一九八二)。径二三メートルの円形墳丘の中央に箱形石棺(内法長さ二・〇メートル、幅〇・八メートル、高さ〇・七メートル)をつくり、その内部に一八体分以上の人骨(成人男性五、女性三、不明九、未成人一)を、二〇センチメートルの厚さにびっしりと埋葬していた。しかし、骨の種類によってその個体数には大きな差があり、「一次埋葬地における骨の回収が、かなり不徹底であった」と推定された(山口一九八二・三〇)。同様の例は、成田市長田1号墳(長さ一・七メートルの堅穴式石室、七〇八体を再葬)などでも知られており(藤下・高木一九八〇・四四五・四四八)、再葬制が弥生時代中期中ごろに終焉したとは断定できない。

このように、弥生時代の再葬制は、その中期中ごろに現象的には方形墳丘墓(周溝墓)にとって代わられたが、実は古墳時代まで連続と続い

ていた可能性が少なくないのである。

#### 四 再葬制の意義

##### 再葬の儀礼的意味

東日本弥生時代の再葬制についてはようやくその実態が明らかになってきつつあるが、その意義に関して突っこんだ議論はまだなされていない。ここでは、先に復元した再葬の過程から、再葬の意義について考察を進めることにしたい。

東日本弥生時代の再葬制では、遺骸を解体し骨化したあと、人骨の一部を再葬し、のこりの骨を加熱して細片化したり、石でたたいて割って粉碎し廃棄している。これは、地上から死者を完全に消滅させることを意図した行為であろう。重要なことは、再葬はこれまで一次葬として土葬があり、一定期間を経たのち掘り出して再埋葬するといったニュアンスで理解されてきた。確かに、縄文晩期の伊川津遺跡では、初葬の墓穴が少なからず検出されているが、弥生時代では群馬県沖II遺跡、福島県根古屋遺跡、秋田県生石2遺跡などで報告されているだけである。弥生時代の再葬の初葬が土葬であったという推定は、まだ確固たる根拠をもつものではない。神奈川県大浦山洞穴、群馬県八束脛洞穴などの状況から、遺骸の解体や火葬を早い時期におこなっているとすれば、死から再葬までの間はこれまで考えられてきたより短いものであった可能性がある。とすると、再葬の主要な目的としては、蚩尤伝説を取り上げて遺骸の解体・散葬の意味を論じた折口信夫の説を想い起す。折口の言葉を

借りるならば、「靈魂或は精靈の掘って復活すべき身がらを、一つは分けて揃はない様にし、一つは焼いて根だやしにしてふのである」〔折口一九二六・八〇〜八二〕。要するに、洗骨・火葬は、死霊や悪霊が遺骸にとりついて人間に死や災厄をもたらす形で死者が復活することを防ぐ手段なのであった。したがって、もし初葬として土葬をおこなっているとすれば、その間は死者の体から肉すなわち靈魂を分離し、それを靈界に送る期間であったということになろう。

埋葬II土葬は、死者に対する愛情から死が確認された後、腐敗が進行しないうちに土中に埋めるところに出発していたと思われる<sup>(5)</sup>。しかし、彼らが死一般に対する恐れをもっていたかどうかは明らかでない。大林太良は、死後も靈魂の存在を信じ、死を恐れないベトナムやメラネシアの民族例をいくつも紹介している〔大林一九七七・九七〜一〇三〕。

靈魂不死の觀念が日本列島でいつ成立したのか、考える材料は少ないが、再葬例がすでに縄文早期に愛媛県美川村上黒岩岩陰で報告されていること〔森本ほか一九七〇〕は、一つの手がかりとなる。再葬はその後、縄文後期の広島県東城町帝釈寄倉岩陰では、二〇体以上のまとまりが二箇所のことされており〔戸沢ほか一九六八・七〜一二〕、その一部には火を受けた痕跡が認められたから、一部火葬の後に再葬している可能性もある。

火葬は、縄文前期中葉の岡山県瀬崎町彦崎貝塚を最古例として、その後も中期に長野県戸倉町幅田遺跡、そして後期の諸例が知られている〔石川一九八八〕。彦崎貝塚例は、直径三〇センチメートル、深さ二三セ

ンチメートルの円形土坑に頭骨三個を巴状に配し、他の部分の骨はばらばらで、同じ穴のなかに埋葬してあり、骨は焼けていた、という〔池葉須一九七二・二三〕。記述からすると、別地点で焼いた後にこの土坑に埋葬したようである。幅田遺跡例は、径約二五メートルの環状列石の第Ⅱブロック礫群の下にある小土坑内に、焼けた成人の頭蓋骨片一一個を埋めたもので、「この場所で焼かれたものではなく、ほかで焼かれたものに土坑内に納められたとみるべきである」という〔森島一九八二・一三〇～一三一〕。

けれども、これらの火葬例は、各地でポツンポツンと検出されているという状況であって、一つの地域で連綿と続いている普遍的な葬法にはみえない。どの地方でも後期までは、主流はあくまでも一度土葬するだけの葬法である。

火葬の起源を示唆するのは、縄文中期の勝坂式期に属する千葉市加曽利北貝塚Ⅱ―二九号住居址で、成人男性一、熟年女性二、少年一体の遺骸の上で見いだされた大きな焚火の跡であって、そのうち一体の頭部と胸骨の一部は焼けて炭化していた。これを、「死亡の原因や苦痛の状態が異常であったがため、ムラビトはその悪霊を恐れ、死体に触れることを忌みきらった。通常なら、他へ移して堅穴墓坑の中に丁寧に埋葬するのであるが、この場合、そのままの状態で埋葬し、家に火をかけて厄払いをした」と考える後藤和民の説〔後藤一九七〇・二二一〕は、妥当なところであろう。そうであれば、焼けた人骨を拾って土葬こそしていないが、この例も一種の火葬とみなすこともできよう。遺骸の火葬にせよ解

体にせよ、当初は、遺った人々に災厄をもたらす危険のある変死・凶死した人だけを対象にしていたのであろう。死霊に対する恐れは、おそらく早くからあった。したがって、再葬や火葬は、霊魂の存在を信じ、死者に対する観念がある段階まで達すると、多元的・自然発生的にでてくる発想であったと考えたい。

しかし、縄文晩期の信越地方の野口・大明神・寺地遺跡例などをみると、火葬はそのような限定された葬法ではなく、普遍的な葬法となっていたと判断せざるをえない。この地域では、遺体を焼き、一部を再葬し、大部分を遺棄する葬法がすでに定着していた。また、同時期の東海地方西部の保美・伊川津・吉胡遺跡などでは、遺骸の盤状集積を典型として、一度土葬した遺体を掘り出して再度土葬または甕棺葬する葬法を盛んにとっていた。しかし、伊川津遺跡のばあいでは、遺体のうち頭骨と四肢骨を中心に再葬するという方式であった。東日本弥生時代の再葬制は、これら中部地方の縄文晩期の再葬制の普遍化にはかならない。

縄文晩期の東海地方西部は、抜歯・叉状研歯・鹿角製腰飾りなど通過儀礼と関連をもつ諸儀礼と装身を著しく発達させ、西日本の各地に大きな影響を与えた特別な地域である。死は人生最後の区切りである。それを彼らは肉体の死ととらえ、骨化して、ある場合はその骨を完全に破壊してはじめてすべての通過儀礼を終了したとみなしたのである。死者は、これらの儀礼を通過して祖先あるいは祖霊の仲間入りを果たすと信じられていたのであろう。通過儀礼は、人生の節目を通過したあととは後戻りしない、言いかえると、過去をその都度切り離して前にのみ進むという

発想である。彼らにとっては、凶死でなかったとしても、死者がふたたび現世に帰ってくるのは災厄をもたらすことであって、それよりも、祖先たちの住む他界に送りこむことが大事だったのであろう。死者の靈魂は、祖靈の世界で新たな肉体を得て再生するものである。骨本来の姿をなくしたあとで再葬される人骨の細片少々は、もはや骨のエッセンスなのであって、他界での身体に必要な骨として、そして再生に必要な靈の依代としての意味をもっていたのではないだろうか。

ではなぜ再葬用の棺として壺を選択することが、弥生前—中期の関東・東北地方南部で普遍化したのであろうか。近年明らかになってきた東日本弥生Ⅰ期の稲作農耕と再葬制の発達との間にはどのような関連があったのであろうか。

壺は、弥生時代にあつては稲作とともに出現する稲のシンボリックな存在である。それは壺が翌年の種粃あるいは米酒の貯蔵容器という用途をもっている点に由来していたのであろう。長野県塩崎遺跡の木棺墓上に多数の壺を置いてあつたことは、そのようなことを示唆する。とすれば、再葬用の棺に壺が多用される理由も、そこに糸口を求めることができるかもしれない。人骨のごく一部を再葬するために多数の壺を用いているのは、壺が容器としてのみ供されているのではなく、墓地まで飲食物の容器としても運んできたことを暗示しているのであろう。人骨のはいっていない壺にまで石や土器片で蓋をしているのは、壺のなかに飲食物がはいっていたからなのかもしれない。

## 人歯・骨着装の社会的意味

死者の歯・骨を着装する風習は、縄文

時代ではごく少数は知られているけれども、選んだ骨や加工の方法はまちまちで、定式化していたとは到底考えられない。少なくとも縄文晩期の東日本では人歯加工品の存在はまだ知られていない。現状では、人歯加工品は、東日本では弥生時代に出現したものと判断するほかない。この点は重要な手がかりを提供する。

穿孔人骨の意味については、それを身につけたのは、「死者への愛情と尊敬からだろう」〔佐原 一九七五・四四〕とか、その素材が幼児から成人まで及んでいることから「穿孔人歯骨は基本的にその集団内の全構成員にわたって作製された」とみなし〔外山ほか 一九八九・一六〕、「亡き肉親の一部を身につけることによって、死者と生活を共にする思想のあらわれ」という説明がなされている〔宮崎ほか 一九八五・一〇四〕。しかし、一遺跡から出土する穿孔人歯・骨の数は、「全構成員」の歯・骨を加工したというほどには多くない。同じ遺跡で加工していない歯や指骨も多数発見されているので、その理由は、火葬する場所にそのような装身具をもつてくることが少なかったからだともいえない。八束脛、根古屋、緒立遺跡などで人骨片の廃棄場所から検出された事実、むしろこれらの装身具が着装者とともに廃棄されるべき存在であつて、管玉などのように再葬墓までもちこむものではなかったことを暗示している。そう考えてよければ、火葬あるいは再葬はすべての人が対象となつたが、歯・骨を抜き取り装身具にするのは、その集団のなかで特別な構成員とみなされていた一部の人たちである可能性がつよい。このことを別の資料から裏づけるのは、出流原、女方遺跡などで、個々の再葬墓から出土する

管玉の数に多寡の差が著しいことである。管玉の数が、被葬者間の地位・身分などの差を反映しているとすれば、歯骨製装身具の意味は、次第にしばられてくる。

歯骨を抜いて装身具にするのは、死者に対する愛情などに発しているのではなく、特定の死者の生前にもっていた社会的属性・人格あるいは権利義務を遺族が相続・継承するシンボリックな行為とみるほうがよいのではないだろうか。弥生人の権利義務の実態がどのようなものであったのか、明言はしにくい、土地の占有権、各種の資材の所有・使用权、他集団との交渉権、葬祭、各種の共同労働など集団維持に必要な費用・食料の負担などがあつたであろう。歯・骨を抜くのは男女ともであるのか、それとも男性だけであるのか、重要な点が不明なまま議論を先に進めなければならぬが、例えば、家長を務めていた男が亡くなったとして、彼の死が確定的となった時点で、彼が生前にかかわっていた社会のある部分——地位、身分、役割、権利、未亡人（配偶者）など——の空白を、遺族は補填しなければならぬ。ただ、歯・骨の性は明らかでないが、八東脛遺跡出土の歯骨加工品のなかに三歳前後の乳歯と未成年者の基節骨が混ざっているから、家長権の継承だけでなかったようにもみえる。しかし、この幼児や少年は、成長したあかつきには家長になることを約束されていたと想像することもできる。縄文・弥生時代において、ある特定の家系あるいは血統の者を、生まれたときから特別視する社会関係が存在したことが、又状研歯者や装身具着装者の分析によって推定できるからである〔春成一九八九・一二三～一二七〕。

人歯・骨の装身具が普遍的に存在するのは、東日本の弥生農耕社会の初期段階である。稲作の開始に伴って新しい権利義務が生じた段階で、人々はある特定の権利義務の相続の問題に異常に敏感になった時だったのであろう。

ここで再度問題になってくるのは、人肉を煮たのは骨から肉を外しやすくするのが主目的であつたとしても、それだけであつたのかという点である。鈴木尚は、伊川津遺跡と大浦山洞穴の人骨にのこされた傷が、獣骨と完全に一致することを根拠にして、人肉食を説いた。大林太良は、複葬の分布が死体保存や族内食人俗の分布とほぼ一致し深い関係にあり、それは、「死者と生者とのあいだの緊密な関係を維持しようという態度」であると論じている〔大林一九七七・九六～九七〕。

東日本の弥生人は、再葬を盛んにおこない、死者の歯や骨で作った装身具を身につける風習をもっていた。しかし、死後歯骨を抜かれた人も、それらを身につけた人も一部の人に限られていた。その意味が特定者の権利義務の継承儀礼にあつたとすれば、のこりの一般の人々の権利義務の継承儀礼も同時に存在してよい。死後遺体を解体されたのは、すべての人である。このように考えを進めていくと、近親者の亡くなったあと、その権利義務を継承する儀礼行為の一環として、その肉を遺族が食べたことはないともいえないであろう。

(一九九二・九・二五)

# 註

(一) 小野天神前遺跡出土の焼けた骨は、獣骨であつたために、再葬墓でない



という説もだされている。しかし、この遺跡は、縄文時代後期の遺跡と重なっており、その時期の焼けた獣骨が広く散布しているから、再葬墓から出土する獣骨も古い時期のものが混入したと考えられる。なお、弥生時代の再葬人骨も火葬されていたとすれば、焼骨のこつていてよいから、ここでは生骨が再葬されたと考えたほうがよさそうである。

- (2) 遺骨の破壊例としては、縄文晩期では、伊川津SZ一六号、女性、熟年、ほぼ完全な人骨、保美KG二〇号、男性、成人、不完全人骨（鈴木一九三八・四八）、保美SZ一九六三・七号、男性、老年（鈴木一九七五・二六九・二七二）、弥生前期では土井ヶ浜一四四号（英雄）、男性（金関ほか一九六三・三九二・四六）・（金関一九六三）などが、頭を打ち割られている顕著な例である。これらも、闘争によるものではなく、死後に破壊された可能性がある。

- (3) 生石2遺跡は、概報が刊行されているだけであるので、判断を下しにくい。私は小野忍氏の案内で発掘資料のごく一部を観察したにすぎないが、「石皿転用の台石遺構1」の石皿には、その上で骨を砕いたような叩き傷は認められない。叩き石状の円礫も叩いた痕跡はつきりせず、また、人骨を砕くには小さすぎると思われた。その一方、付近出土の頁岩製の剝片には刃こぼれが認められた。なお、木炭混じりの黒褐色土に含まれていた骨粉は「灰白色」を呈していたというから、人骨は焼かれている可能性もある。焼骨を砕くのであれば、叩き石は小さくてもよい。

- (4) 蚩尤は『書経』にてくる、黄帝と戦って敗死した中国神話の巨人英雄神。  
(5) 日本列島で知られている最古の埋葬は、旧石器時代後期、約二万年前の大分県大野郡清川村岩戸遺跡（坂田一九八〇）や神奈川県綾瀬市上土棚遺跡（中村一九九二）から発掘された土坑墓Ⅱ土葬である。岩戸遺跡では一基だけであるが、上土棚遺跡では五基の土坑が密集していたから、この時期には埋葬が明らかに一つの社会的な慣習になっていたと認めることができる。

- (6) 縄文中期に属する熊本県城南町阿高貝塚の「火葬」例は、清野謙次によると、成人女性を埋葬後、一定年月を経て軟部がほぼ腐敗した後に、胸部付近に直径四、五尺の穴を掘って焚火をおこなったもので、周囲の獣骨片や貝殻も焼けていた。そこで、焚火によって旧埋葬の人骨が偶然焼けてしまったのだと説明している（清野一九二〇・四一〜四二）。

- (7) 土肥直美・田中良之は、九州の古墳時代に少数みられる抜歯習俗（二〇三体のうち二四体が抜歯していた）について、服喪の抜歯で、その意味は中小豪族の家父長権の継承儀礼にあるとみている（土肥・田中一九八八・二〇九〜二二二）。そう考えてよければ、人歯・骨を抜き取り装身具にかえるのと類似した思考といえるだろう。

#### 参考文献

- 赤星直忠 一九六七「三浦半島の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』九一〜一〇二、平凡社。  
阿久津久 一九七七『茨城県大宮町小野天神前遺跡』資料編、茨城県歴史館。  
浅川利一・河合英夫 一九八七「横須賀市・ひる畑遺跡の調査」『第11回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』六三〜六四。  
荒巻 実・若狭 徹ほか 一九八六『沖Ⅱ遺跡』藤岡市教育委員会。  
——— 宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄 一九八八「沖Ⅱ遺跡における「再葬墓」の構造―出土骨類の分析から―」『群馬県立歴史博物館紀要』九・五九〜九八。  
飯島義雄・宮崎重雄・外山和夫 一九八六「八束腔洞窟遺跡における抜歯の系譜」『群馬県立歴史博物館紀要』七・四五〜七四。  
——— 一九八七「所謂「再葬墓」の再検討に向けての子察―特に出土骨類に焦点をあてて―」『群馬県立歴史博物館紀要』八・二一〜五〇。  
池田次郎 一九八一「出土火葬骨について」『太安萬侶墓』奈良県史料名勝天然記念物調査報告、四三・七九〜八八。  
池葉須藤樹 一九七二「岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告」私家版。  
石川日出志 一九八一「三河・尾張における弥生文化の成立」『駿台史学』五二・三九〜七二。  
——— 一九八五「関東地方初期弥生式土器の一系譜」『日本原史』四七九〜五〇六、吉川弘文館。  
——— 一九八七「再葬墓」『弥生文化の研究』八・一四八〜一五三、雄山閣。  
——— 一九八八a「安房神社洞窟遺跡出土抜歯人骨」『利根川』9・一〜三、利根川同人。

- 一九八八b「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』七四・八四、  
一一〇。
- 一九八九「再葬墓」研究の課題」『考古学ジャーナル』三〇二・  
一七〇二。
- 梅宮 茂・大竹憲治編 一九八六『霊山根古屋遺跡の研究』霊山根古屋遺跡調  
査団。
- 大塚和義 一九七九「縄文時代の焼けた人骨について」『八天遺跡』本文編・  
二〇三・二〇五、北上市教育委員会。
- 大場磐雄 一九三三「安房神社境内発見古代洞窟調査概報」『史前学雑誌』五  
一・一三〇・三九。
- ・佐野大和一九五六『常陸鏡塚』国学院大学考古学研究报告、一。
- 大林太良 一九七七『葬制の起源』角川選書九二、角川書店。
- 大森元吉 一九六七「二次葬の社会的意味」『アフリカ研究』五(一九六九)ア  
フリカの伝統宗教と社会組織」一二九・一四四、杉山書店。
- 小田野哲憲編 一九八五『岩手県東山町熊穴洞穴遺跡発掘調査報告書』岩手県  
立博物館調査研究报告書、一。
- 小野 忍 一九八七『生石2遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査の概要―』酒  
田市教育委員会。
- 折口信夫 一九二六「餓鬼阿彌蘇生譚」『民族』一一二・七二・八二(一九六五  
『折口信夫全集』二・三四一・三五二、中央公論社)。
- 書上元博 一九八八「東日本弥生文化黎明期の墓制に関する覚書―いわゆる再  
葬墓制を中心として―」『東日本の弥生墓制―再葬墓と方形周溝墓―』第九  
回三県シンポジウム・七四四・七四九、群馬県考古学研究所・千曲川水系古  
代文化研究所・北武蔵古代文化研究会。
- 金関丈夫 一九五七『洗骨』『世界大百科事典』一七、平凡社(一九八二『考  
古と古代』一四三・一四七、法政大学出版局)。
- ・坪井清足・金関恕 一九六一「山口県土井浜遺跡」『日本農耕文化  
の生成』本文篇・二二三・二五三、東京堂。
- 一九六三「発掘から推理する」二、土井ヶ浜の英雄、朝日新聞西部  
版(一九八二『考古と古代』五・八、法政大学出版局)。
- 金子拓男編 一九八三『緒立遺跡発掘調査報告書』黒崎町教育委員会。
- 清野謙次 一九二〇「備中国浅口郡大島村津雲貝塚人骨報告」『京都帝國大学文  
学部考古学研究报告』五・二九・六三。  
工業普通 一九七〇「農耕文化の伝播」『古代の日本』7、関東・二五・三七、  
角川書店。
- 小金井良精 一九三三「安房神社洞窟人骨」『史前学雑誌』五一・一・二九。  
国分直一 一九七二『日本民族文化の研究』四三四・四八一、慶友社。
- 後藤和民 一九七〇「加曾利北貝塚人骨の埋葬」『加曾利貝塚』Ⅲ・二〇四・  
二二三、中央公論美術出版。
- 坂田邦洋 一九八〇『岩戸遺跡』広雅堂。
- 笹沢 浩 一九八七「長野県」『日本考古学年報』三八(一九八五年度版)・一  
五五・一六四。
- 笹川一郎・高橋正志 一九八三「人骨」『緒立遺跡発掘調査報告書』九六・一  
〇二、図版四一。
- 佐藤由紀男 一九八五「静岡県三ヶ日町殿畑遺跡出土の土器について(下)」『古  
代文化』三七・一・一七・二六。
- 佐原 眞 一九七五「海の幸と山の幸」『日本生活文化史』一、日本の生活の  
母胎・二二・四四、河出書房新社。
- ・一九七六『弥生土器』日本の美術、一二五、至文堂。
- 設楽博己 一九八八a「再葬墓研究の現状と課題」『考古学雑誌』七四・二・  
一〇八・一〇九。
- ・一九八八b「群馬県の再葬墓とその関連遺跡」『東日本の弥生墓  
制―再葬墓と方形周溝墓―』第九回三県シンポジウム資料・二九〇・三四八。  
一九九一「最古の壺棺再葬墓」『国立歴史民俗博物館研究報告』三  
六・一九五・二三八。
- 杉原莊介 一九六七「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」『考古学集刊』三  
一・三三七・五六。
- ・戸沢充則・小林三郎 一九六九「茨城県殿内(浮島)における縄文・  
弥生両時代の遺跡」『考古学集刊』四・三・三三・三七一。
- ・大塚初重 一九七四「千葉県天神前における弥生時代の墓址群」明  
治大学文学部研究报告 考古学、四。
- ・一九八一「栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群」明治大学文  
学部研究报告 考古学、八。
- 鈴木 尚 一九三五「石器時代貝塚出土の獣骨片について」『人類学雑誌』五〇

- 一三三・三四・四一。  
 一九三八「日本石器時代人骨の利器による損傷に就て」『人類学雑誌』五三・七二・一三三。  
 一九六六「弥生時代の食人について」『日本人類学会・日本民族学会連合大会第二〇回紀事』一三五・一三七。  
 一九六〇『骨』学生社。  
 一九七五「闘争により損傷された三個人骨」『人類学雑誌』八三・三二・六九・二七七。  
 一九八三「骨から見た日本人のルーツ」岩波新書、岩波書店。  
 須藤 隆 一九七九「東日本における弥生時代初頭の墓制について」『文化』四三一・二・三七・七二。  
 ・田中 敏編 一九八四『福島県会津若松市墓料遺跡 一九八〇年度発掘調査報告書』会津若松市教育委員会。  
 関 孝一 一九六七「東信濃鳥羽山洞穴における古代祭祀遺跡」『考古学雑誌』五二・三・四五・五九。  
 関 雅之・田中耕作・石川日出志・阿部朝衛・増子正三 一九八二『村尻遺跡』新発田市教育委員会。  
 田中 國男 一九四四『縄文式弥生式接触文化の研究』田中國男博士遺著刊行会。  
 田中 琢 一九九一『倭人争乱』日本の歴史2、集英社。  
 寺門之隆・嶋田武男・多賀谷昭・石井みき子 一九七八『森の宮遺跡出土人骨』『森の宮遺跡 第三・四次発掘調査報告書』一六六・一七〇、難波宮址顕彰会。  
 寺村光晴・青木重孝・関 雅之編 一九八七『史跡・寺地遺跡』青海町。  
 戸沢充則・堀部昭夫 一九六八「帝釈寄倉岩陰遺跡の第三次・第四次調査」『帝釈遺跡群の調査研究』三・七・一三、帝釈峽骨跡群発掘調査団。  
 土肥直美・田中良之 一九八八「古墳時代の抜歯風習」『日本民族・文化の生成』一・一九七・二五、六興出版。  
 外山和夫・宮崎重雄・飯島義雄 一九八九「再葬墓における穿孔人歯骨の意味」『群馬県立歴史博物館紀要』一〇・一・一三〇。  
 永峯光一 一九八二「鳥羽山洞穴遺跡」『長野県史』考古資料編・主要遺跡(北・東信)・七四八・七六一、長野県史刊行会。  
 中村喜代重 一九九一「綾瀬市上土棚遺跡第3次調査」『第15回神奈川県遺跡

- 調査・研究発表会発表要旨』四八・五一、神奈川県考古学会。  
 西沢寿晃・小松 虔 一九七八「長野県佐久市月明沢遺跡発掘資料について」『長野県考古学会誌』三二・三三・三七。  
 芳賀英一 一九八六「下谷ヶ地平B・C遺跡」国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告、IV、福島県教育委員会。  
 春成秀爾 一九八六「弥生時代」『図説 発掘が語る日本史』二(関東・甲信越編)・二一六・一五六、新人物往来社。  
 一九八七「抜歯」『弥生文化の研究』八、祭と墓と装い・七九・九〇、雄山閣。  
 一九八八「埋葬の諸問題」『伊川津遺跡』三九五・四二〇、渥美町教育委員会。  
 一九八九「又状研歯」『国立歴史民俗博物館研究報告』二一・八七・一三七。  
 一九九一「人骨製腕輪」『考古学雑誌』七六・四・八七・九六。  
 馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 一九八六a「根古屋遺跡出土の人骨・動物骨」『霊山根古屋遺跡の研究』九三・一三、霊山町教育委員会。  
 ・大竹憲治 一九八六b「根古屋遺跡出土の穿孔された人骨・歯装身具について」『霊山根古屋遺跡の研究』一一四・一二〇。  
 林 茂樹 一九八三「野口遺跡」『長野県史』考古資料編、主要遺跡(南信)・八九四・八九七、長野県史刊行会。  
 樋口昇一 一九八三「大明神遺跡」『長野県史』考古資料編、主要遺跡(中信)・一七四・一八三、長野県史刊行会。  
 平野進一 一九八八「群馬県」『日本考古学年報』三九(一九八六年度版)・一九・一二六。  
 蛭間真一・中里 敬・森本岩太郎ほか 一九七八「上敷面遺跡」深谷市埋蔵文化財調査報告書。  
 藤下昌信・高木博彦 一九八〇「成田市内の古墳」『成田市史』原始古代編・三八九・四四九、成田市。  
 星田享二 一九七二「東日本弥生時代初頭の土器と墓制」『史館』七・一〇・五二。  
 前沢輝政 一九五五「栃木県佐野市八幡山古墳調査概報」『古代』一六・一・一六。

- 宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄 一九八五「日本先史時代におけるヒトの骨および歯の穿孔について―八束脛洞窟遺跡資料を中心に―」『群馬県立歴史博物館紀要』六・七七～一〇八。
- 物井古墳発掘調査会 一九八二『物井1号墳発掘調査報告書』四街道市教育委員会。
- 森島 稔 一九八二「幅田遺跡」『長野県史』考古資料編、主要遺跡(北・東信)・二二九～一四〇、長野県史刊行会。
- 森本岩太郎・小片丘彦・小片 保・江坂輝弥 一九七〇「受傷寛骨を含む縄文早期の二次埋葬例」『人類学雑誌』七八・三・二二五～二四四。
- 一九八八「本州北端における縄文時代後期改葬墓棺内人骨について」『日本民族・文化の生成』一・五五～七六、六興出版。
- 八木久栄編 一九七八『森の宮遺跡 第三・四次発掘調査報告書』難波宮址頭彰会。
- 矢口忠良編 一九八六『塩崎遺跡群Ⅳ―市道松節―小田井神社地点遺跡―』長野市の埋蔵文化財、一八。
- 安井俊則編 一九九一『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告、二一。
- 山折哲雄 一九八六「靈魂の浄化」『日本民俗文化大系』二二、現代と民俗・三〇九～三七二、小学館。
- 山口 敏 一九八二「出土人骨」『物井1号墳発掘調査報告書』一四～三一、四街道市教育委員会。
- 横須賀考古学会編 一九八四『三浦半島海蝕洞穴遺跡』横須賀考古学会。
- 吉田 稔編 一九九一『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書、九五。
- 吉田町教育委員会編 一九八二「わらび沢岩陰遺跡」『吉田町史』四二～五〇、吉田町。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

## The System of Reburial in the Yayoi Period

HARUNARI Hideji

In the early Yayoi period in eastern Japan, there existed a common reburial system, in which the body was ossified by some method or other, and some of the bones were placed in a jar to be buried. The various sites considered to be connected with reburial show a wealth of variety, because various stages of the reburial process have remained at different sites.

Reburial followed the following processes: burial, — exhumation, — bone selection, — placement in a jar coffin, and reburial in cemetery, — burning of the remaining bones. It also took the following form: immediate dissection without burial, — bone selection, — etc. The body was first separated into bones and flesh; then the bones were fragmented by splitting or burning. Fragmenting the bones to leave no trace of their original shape may show the intention of preventing the resurrection of the dead, possessed by a dead spirit or an evil spirit. In other words, there existed an inordinate fear of the dead and other spirits in this period.

Also, at this time, accessories made of human teeth or finger bones were fashionable. The materials were taken from dead persons and pierced through, but this fashion seems to have been limited to certain people. They apparently wore the accessories as a symbol of succession to the status or position occupied by the dead person before death.

Analysis of reburial graves shows that a cemetery was composed of many small groups, with ten graves or so in each group. Therefore, it is deduced that the unit of the small group was successive generations of the same family.

Reburial graves came to an end around the middle of the Middle Yayoi period, replaced by square mound burial. However, examples of reburial are known from Kofun of the 6th century; so it can be supposed that identification has merely been delayed, because of the scarcity in the Later Yayoi period of graves that conserved human bones.